荷鞍ふむ春のすゞめや縁の先　土芳
閻の夜や巣をまどはしてなく鶺　芭蕉
越より飛彈へ行とて、籠のわたり
のあやうきところ〴〵、道もなき
山路にさまよひて
鷲の巣の樟の枯枝に日は入ぬ　伊賀　凡兆
かすみより見えくる雲のかしら哉　石口
子や待ん餘り雲雀の高あがり　杉風
ひばりなく中の拍子や雉子の聲　芭蕉
芭蕉庵のふるきを訪
菫草小鍋洗しあとやこれ　江戸　曲水
木瓜肪旅して見たく野はなりぬ　山店
畫讃
山吹や宇治の焙爐の匂ふ時　芭蕉
白玉の露にきはつく椿かな　車來
わがみかよわくやまひがちなり
ければ、髪けづらんも物むづか

しと、

此春さまをかへて

笄（カウガイ）もくしも昔やちり椿　津國山本　羽紅
蝸牛打かぶせたるつばき哉　坂上氏
うぐひすの笠おとしたる椿哉　伊賀　芭蕉
はつざくらまた追々にさけばこそ　利雪
東叡山にあそぶ
小坊主や衾にかくれて山ざくら　其角
一枝はをらぬもわろし山ざくら　尚白
鶏の聲もきこゆるやま櫻　凡兆
眞先に見し枝ならんちる櫻　丈艸
有明のはつ〳〵に咲く遅ざくら　史邦
常齋にはづれてけふは花の烏　千那
葛城のふもとを過る
猶見たし花に明行神の顏　芭蕉
いがの國花垣の庄は、そのかみ
南良の八重櫻の料に附られける

と、云傳へはんべれば

一里はみな花守の子孫かや　同

亡父の墓東武谷中に有しに、三歳にて別れ、廿年の後かの地にかへりぬ。墓の前に櫻植置侍るよし、かね〴〵母の物がたりつたへて、その櫻をたづね佗けるに、他の墓猶さくら咲みだれ侍ればまがはしや花吸ふ蜂の往還り　園風

知人にあはじ〳〵と花見かな　去來

ある僧の嫌ひし花の都かな　凡兆

浪人のやどにて

鼠共春の夜あれそ花鞠　半殘　伊賀

腥きはな最中のゆふべ哉　長眉　伊賀

はなも奥有とや。

よしのに深く吟じ入て

大峯やよしのゝ奥の花の果　曾良

道灌山にのぼる

道灌や花はその代を嵐哉　嵐蘭

源氏の繪を見て

欄干に夜もちる花の立すがた　羽紅

庚午の歳家を燒て

燒にけりされども花はちりすまし　北枝　加賀

はなちるや伽藍の樞（クルヽ）おとし行　凡兆　江戸

海棠のはなは滿たり夜の月　普船

大和行脚のとき

草臥て宿かる比や藤の花　芭蕉

山鳥や蹴躓よけ行尾のひねり　探丸

やまつゝじ海に見よとや夕日影　智月　伊賀

兎角して卯花つぼむ彌生哉　山川

鷺（サヽ）の聲きゝそめてより山路哉　式之

木曾塚

其春の石ともならず木曾の馬　乙弘

春の夜はたれか初瀬の堂籠　曾良

望湖水惜春

行春を近江の人とおしみける　芭蕉

猿蓑集　卷之五

（二十七）白氏長慶集ニ出典ガアル。刷、ノゴフ、ハラフ、キヨムノ意ガアル。

鳶の羽も刷（カイソクロヒ）ぬはつしぐれ　去來

一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉

股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆

たぬきをおどす篠張の弓　史邦

まひら戸に蔦這かゝる宵の月　蕉

人にもくれず名物の梨　來

かきなぐる墨繪をかしく烁暮て　邦

ほきごゝろよきめりやすの足袋　兆

何事も無言の内はしづかなり　來

里見え初て午の貝ふく　蕉

ほつれたる去年のねござのしたゝるく　兆

芙蓉のはなのはら〳〵とちる　邦

吸物は先出來されしすゐせんじ　蕉

三里あまりの道かゝへける　來

（二十八）原本盧同○トアレド標注ニヨレバ同ハ全ノ誤字デアルト。

（二十八）この春も盧仝が男居なりにて

邦　さし木つきたる月の朧夜

兆　苔ながら花に並ぶる手水鉢

蕉　ひとり直しや今朝の腹だち

來　いちどきに二日の物も喰て置

兆　雪げにさむき嶋の北風

邦　火ともしに暮れば登る峯の寺

來　ほととぎす皆鳴仕舞たり

蕉　痩骨のまだ起直る力なき

邦　隣をかりて車引こむ

兆　うき人を枳殻垣よりくぐらせん

蕉　いまや別の刀さし出す

來　せはしげに櫛でかしらをかきちらし

兆　おもひ切たる死ぐるひ見よ

邦　青天に有明の朝ぼらけ

來　湖水の秋の比良のはつ霜

蕉　柴の戸や蕎麥ぬすまれて歌をよむ

邦　ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ

兆　押合て寝ては又立つかりまくら

蕉　たゝらの雲のまだ赤き空

來　一構鞦（シリガイ）つくる窓のはな

兆　枇杷の古葉に木の芽もえたつ

邦　去來九

蕉　芭蕉九

兆　凡兆九

邦　史邦九

兆　市中は物のにほひや夏の月

蕉　あつし〳〵と門〳〵の聲

來　二番草取りも果さず穗に出て

邦　灰うちたゝくめ一枚

兆　凡兆

蕉　芭蕉

來　去來

邦　史邦

此筋は銀も見しらず不自由さよ　蕉
たゞとひやうしに長き脇差　來
草むらに蛙こはがる夕まぐれ　兆
蕗の芽とりに行燈ゆりげす　蕉
道心のおこりは花のつぼむ時　來
能登の七尾の冬は住うき　兆
魚の骨しわぶる迄の老を見て　蕉
待人入し小御門の鎗（カヤ）　來
立かゝり屏風を倒す女子共　兆
湯殿は竹の簀子佗しき　蕉
茴香（ウヰキヤウ）の實を吹落す夕嵐　來
僧やゝさむく寺にかへるか　兆
さる引の猿と世を經る妹の月　蕉
年に一斗の地子はかる也　來
五名六本生木つけたる澁（シブタマリ）　兆
足袋ふみよごす黒ぼこの道　蕉
追たてゝ早き御馬の刀持　來

でつちが荷ふ水こぼしたり　兆
戸障子もむしろがこひの賣屋敷　蕉
てんじやうまもりいつか色づく　來
こそ〳〵と草鞋を作る月夜さし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉
そのまゝにころび落たる舛落　來
ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵に暫く居ては打やぶり　蕉
いのち嬉しき撰集のさた　來
さま〴〵（ウ）に品かはりたる戀をして　兆
浮世の果は皆小町なり　蕉
なに故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ　來
御留守となれば廣き板敷　兆
手のひらに虱這はする花のかげ　蕉
かすみうごかぬ晝のねむたさ　來

芭蕉 十二
去來 十二

灰汁桶の雫やみけりきり〴〵す　凡兆
あぶらかすりて宵寢する秋　芭蕉
新疊敷ならしたる月かげに　野水
ならべて嬉し十のさかづき　去來
千代經べき物を樣〳〵子日して　蕉
鶯の音にたびら雪降る　兆
乘(ウ)出して肱に餘る春の駒　來
摩耶が高根に雲のかゝれる　水
ゆふめしにかますこ喰へば風薰　兆
蛭の口(クチ)處(ドコ)(ト)をかきて氣味よき　蕉
ものおもひけふは忘れて休む日に　水
迎せはしき殿よりのふみ　來

金鍔(キンツバ)と人によばるゝ身のやすさ　蕉
あつ風呂ずきの宵〳〵の月　兆
町内の秋も更行明やしき　來
何を見るにも露ばかり也　水
花とちる身は西念が衣着て　蕉
木曾の酢莖に春もくれつゝ　兆
(名)かへるやら山陰傳ふ四十から　水
柴さす家のむねをからげる　來
冬空のあれに成たる北颪(キタオロシ)　兆
旅の馳走に有明しおく　蕉
すさまじき女の智惠もはかなくて　來
何おもひ草狼のなく　水
夕月夜岡の萱ねの御廟守る　蕉
人もわすれしあかそぶの水　兆
うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　水
又も大事の鮓を取出す　來
堤より田の青やぎていさぎよき　兆

加茂のやしろは能き社なり　蕉
物うりの尻聲高く名乘すて　來
雨のやどりの無常迅速　水
晝ねふる青鷺の身のたふとさよ　蕉
しよろ〳〵水に藺のそよぐらん　兆
糸櫻腹いつぱひに咲にけり　來
春は三月曙のそら　水

凡兆九
芭蕉九
野水九
去來九

餞乙劦東武行　芭蕉

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁
かさあたらしき春の曙　乙劦

雲雀なく小田に土持比なれや　珎碩
しとぎ祝うて下されにけり　素男
片隅に虫齒かゝへて暮の月　劦
二階の客はたゝれたるあき　蕉
放やるうづらの跡は見えもせず　男
稻の葉延の力なきかぜ　碩
ほつしんの初にこゆる鈴鹿山　蕉
内藏頭かと呼聲はたれ　劦
卯の刻の箕手に並ぶ小西方　碩
すみきる松のしづかなりけり　男
萩の札すゝきの札によみなして　劦
雀かたよる百舌鳥の一聲　智月
懷に手をあたゝむる烁の月　凡兆
汐さだまらぬ外の海づら　劦
鑓の柄に立すがりたる花のくれ　去來
灰まきちらすからしなの跡　兆
春の日に仕舞てかへる經机　正秀

店屋物くふ供の手がはり　半殘
汗ぬぐひ端のしるしの紺の糸　土芳殘
わかれせはしき鷄の下　園風殘
大膽におもひくづれぬ戀をして　猿雖殘
身はぬれ紙の取所なき　芳風
小刀の蛤双なる細工ばこ　園風殘
棚に火ともず大年の夜　猿雖殘
こゝもとはおもふ便も須磨の浦　殘
むね打合せ着たるかたぎぬ　風
此夏もかなめをくゝる破扇　雖
醬油ねさせてしばし月見る　芳
咳の隣はちかき縁づたひ　風
添へばそふほどこくめんな顔　蘭
形なき繪を習ひたる會津盆　邦
うす雪かゝる竹の割下駄　史
花に又ことしのつれも定らず　水
雛の袂を染るはるかぜ　紅

芭蕉三
乙刕五
珍碩三
素男三
智月一
凡兆二
史邦二
去來二
正秀一
半殘四

猿蓑集　卷之六

幻住菴記

芭蕉艸

石山の奥岩間のうしろに山有。國分山と云。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして、八幡宮たゝせたまふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚忌なる事を、兩部光を和げ、利益の塵を同じうしたまふも又貴し。日比は人の詣ざりければ、いとゞ神さび、物しづかなる傍に、住捨し草の戸有。よもぎ根笹軒をかこみ、屋ねもり、壁落て、狐狸ふしどを得たり。幻住菴と云。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲水子之伯父になん侍りしを、今は八年斗むかしに成て、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予又市中をさる事十年斗にして、五十年やゝちかき身は、蓑虫のみのを失ひ、蝸牛家を離て、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなごあゆみくるしき北海の荒礒にきびすを破りて、今歳湖水の波に漂、鳰の浮巣の流とゞまるべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端茨あらため、垣ね結添などして、卯月の初いとかりそめに入し山の、やがて出じとさへおもひそみぬ。さすがに春の名殘も遠からず。つゝじ咲殘り、山藤袤に懸て、時鳥しばしば過る程、宿かし鳥の便さへ有を、木つゝきなど、そゞろに興じて、魂吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばたち、人家よきほどに隔り、南薰

峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城有、橋有、釣たるゝ舟有。笠とりにかよふ木樵（キコリ）の聲、麓の小田に早苗とる哥、螢飛かふ夕闇の空に、水鷄の扣音、美景物としてたらずと云事なし。中にも三上山は士峯の俤にかよひて、武藏野の古き栖もおもひいでられ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽千丈が峯袴腰といふ山有。黒津の里はいとくろう茂りて、網代守るにぞとよみけん萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからむと、後の峯に這のぼり、松の棚作、藁の圓座を敷て、猿の腰掛と名付。彼海棠に巣をいとなひ、主薄峯に菴を結べる王翁除佺が徒にはあらず。唯睡癖（二十九）山民と成て、孱顔に足をなげ出し、空山に虱を捫て座ス。たま〳〵心まめなる時は、谷の清水を汲で自ら炊ぐ。とくとくの雫を佗て、一爐の備へいとかろし。はた昔住けん人の殊に心高く住なし侍りて、たくみ置る物ずきもなし。持佛一間を隔て、夜の物おさむべき處などいさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが嚴子にて、此たび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして額を乞、いとやす〳〵と筆を染て、幻住菴の三字を送らる。頓て草菴の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寢と云、さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠越の菅蓑斗、枕の上の柱に懸たり。晝は稀〳〵とぶらふ人々に心を動し、あるは宮守の翁、里のをのこ共入來りて、いのしゝの稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、

（二十九）原本睡辟トスル。

夜座靜に月を待ては影を伴ひ、燈を取ては罔兩に是非をこらす。(三十)かくいへばとてひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦て、世をいとひし人に似たり。倩年月(ツラ〻)の移こし拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。樂天は五臟之神をやぶり、老杜は瘦たり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと、おもひ捨てふしぬ。

先たのむ椎の木も有夏木立

題芭蕉翁國分山
幻住菴記之後

何世無隱士。以心隱爲賢也。何處無山川。風景因人美也。間讀(コノヾロ)芭蕉翁幻住菴記、乃識其賢、且知山川得其人而益美矣。可謂人與山川共相得焉。廼作(スナハチ)鄙草一篇、歌之曰。

琶湖南兮國分嶺
古枩欝兮綠陰淸
茅屋竹椽纔數間
內有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川
風景依稀入誹城
此地自古富勝賢
今日因君尙益榮

元祿庵午仲秌日

震軒具艸

(三十)原本岡○兩トアル。

(三十一)原本年月の月○の字のの字かケル。

几右日記

時鳥背中見てやる麓かな　曲水
くつさめの跡しづか也なつの山　野水
鷄もはら〳〵時か水鷄なく　去來
海山に五月雨そふや一くらみ　凡兆
軒ちかき岩梨をるな猿のあし　千那
細脛のやすめ處や夏のやま　珎碩

贈紙帳

おもふ事紙帳にかけと送りけり　野徑
いつたきて蕗の葉にもるおぶくぞも　里東
螢飛疊の上もこけの露　乙刕
顔（カンバセ）や葎の中の花うつぎ　膳所　怒誰
たど〳〵し峯に下駄はく五月闇　探志
五羽六羽菴とりまはすかんこ鳥　元志
木つゝきにわたして明る水鷄哉　膳所　泥土
笠あふつ柱すゞしや風の色　史邦
月待や海を尻目に夕すゞみ　正秀
しづかさは栗の葉沈む清水哉　亡人　柳陰
涼しさやともに米かむ椎が本　如行
訪に留守なり
椎の木をたがへて啼や蟬の聲　膳所　朴水
目の下や手洗ふ程に海涼し　美濃重井　市隱
文に云こす
膳所米や早苗のたけに夕涼　半殘
麥の粉を土産す

一袋これや鳥羽田のことし麥　之道
書音
一夏入る山（三十二）さばかりや旅ねずき　長崎　魯町
夕立や檜木の臭（カサ）の一しきり　及肩
昇猿腰掛
夕風や田ノ上山のくぼみより　尙白
贈蓑
しら露もまだあらみのゝ行衞哉　北枝
木履（三十三）ぬぐ傍に生けり蓼の花　木節
包紙に書
縫にごす藥袋や萩の露　膳所　扇
稻の花これを佛の土產哉　智月
石山や行かで果せし烁の風　羽紅
桶の輪やきれて鳴やむきり〴〵す　昌房
里はいま夕めしどきのあつさ哉　何處
啼やいとゞ壚にほこりのたまる迄　越人
越人と同して訪合て

（三十二）原本さはかりやノ○カノ字欠ケル。

（三十三）○標注、色紙に書トアル。

蓮の實の供に飛入菴かな　等哉
　明年彌生尋舊菴
春雨やあらしも果ず戸のひつみ　嵐蘭
　同夏
涼しさや此庵をさへ住捨し　曾良

（三十四）標注云、一本韻ヲ韻ニ誤ル。韻ハ響ニ同ジトアル。

（三十五）原本不遑ニ……トアル。

（三十六）原本、余掛錫於洛陽旅亭……トアツテ一ニヨリ二ニ行ク カヘリ點ヲカク。

（三十七）記ニ此叟……トアル。

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也。非レ比ニ彼山寺偸レ衣、朝市頂レ冠笑一。只任ニ心感レ物ニ寫レ興而已矣。洛下逸人几兆去來、隨レ翁遊學。煤舘竹窓、蹤レ等凌レ節斯有レ歲。屬撰ニ此集一玩弄無レ已。自謂、絕ニ超狐腋白裘一者也。於レ是四方唫友憧々往來、或千里寄レ書。書中皆有ニ佳句一。日纔月隆、各程ニ文章一。然有下昆仲騷士不ニ集錄一者、索居竄栖爲レ難レ適レ信。且有下旌倪婦人不ニ琢磨一者、麁言細語爲レ喜レ同レ志。雖レ無レ至ニ其域一、何棄ニ其人一乎哉。果分ニ四序一、作ニ六卷一。故不レ遑ニ廣搜一他家文林一也。維時元祿四稔辛未仲夏、余掛ニ錫於洛陽旅亭一、偶會ニ兆來吟席一。見レ需下記ニ此叟一題中眉尾上、卒援レ毫不レ揣レ拙。庶幾一蓑高張有レ補ニ千詞海漁人一云。

風狂野衲

丈艸漢書
正竹書之

京寺町二條上ル丁
井筒屋庄兵衞板

すみたはら

建、順

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らは、常に芭蕉の軒に行かよひ、瓦の窓をひらき、心の泉をくみしりて、十あまりなゝの文字の野—風をはげみあへる輩也。霜凍り、冬どのゝあれませる夜、この二三子庵に侍て、火桶にけし炭をおこす。菴主これに口をほどけ、宋人の手鼏（カヾマ）らずといへる藥是ならんと、しのゝ折箸に、燖（トキ）のさゝやかなるを堅におき、横になほしつゝ、金屏の松の古さよ冬籠と舌よりまろびいづる聲のみたりが耳に入、さとくもうつろうのめ鷹のめどもの、是に魂のすわりたる。げにやこれを思ひ立、はるの日ののつと出しより、秋の月にかしらかたぶけつゝ、やゝ吟終り、篇なりて、竟にあめつちの二まきにわかつとなん。是をひらきみるに、有聲の繪をあやどりをさむれば、又くぬぎ炭の筋見えたり。けだしくも題號をかく付侍事は、詩の正義にいへる五つのしなな、あるはやまとの巻〳〵のたぐひにはあらねど、例の口に任せたるにもあらず。竊により所ありつる事ならし。ひと日芭蕉旅行の首途に、やつがれが手を携へて再會の期を契り、かつ此等の集の事に及で、かの冬籠の夜、きり火桶のもとにより、くぬぎ炭のふる哥をうちずしつるうつりに、炭だわらといへるは誹也けりと、獨ごちたるを小子聞をりて、よしとおもひうるにや、此しふをえらぶ媒と成にたり。この心もて宜しう序書てよと云捨てわかれぬ。今此事をかうがへ、其初をおもふに、題號おのづからひゞけり。さらに辯をつくる境には

あらじかしとくちをつぐむ。

元祿七の年夏閏さつき初三の日、素龍書。

俳諧炭俵集 上巻

むめがかにのつと日の出る山路かな　芭蕉
處〳〵に雉子の啼たつ　野坡
家普請を春のてすきに(一)とり付て　仝
上のたよりにあがる米の直　芭蕉
宵の内はら〳〵とせし月の雲　仝
藪越はなすあきのさびしき　野坡
御(ウ)(二)頭へ菊もらはるゝめいわくさ　野坡
娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉
奈良がよひおなじつらなる細基(ホソモト)手(デ)　野坡
ことしは雨のふらぬ六月　芭蕉
預けたるみそとりにやる向河岸　野坡
ひたといひ出すお袋の事　芭蕉
終(ヨモ)宵(スガラ)尼の持(三)病を押へける　野坡
こんにやくばかりのこる名月　芭蕉

(一) 原本、とり付てノとカケル。
(二) 原本、ウノ字カケル。
(三) 原本、はカケル。

はつ雁に乗(四)懸下地敷て見る　野坡
露を相手に居合ひとぬき　芭蕉
町衆のづらりと醉て花の陰　野坡
門で押(五)るゝ壬生の念佛　芭蕉
東(名コ)風(チ)風に糞(コヒ)のいきれを吹まはし　仝
たゞ居るまゝに肱(六)わづらふ　野坡
江戸の左右むかひの亭主登られて　芭蕉
こちにもいれどから臼をかす　野坡
方〳〵に十夜の内のかねの音　芭蕉
桐の木高く月さゆる也　野坡
門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉
ひらうた金で表がへする　野坡
はつ午に女房のおやこ振舞て　芭蕉
又このはるも濟ぬ牢人　野坡
法印の湯治を送る花ざかり　芭蕉
なは手を下(オ)りて青麥の出來　野坡
ど(ウ)(七)の家も東の方に窓をあけ　野坡

(四) 標注、乗掛一本舞掛ニ誤ルトアル。
(五) 原本、押ノ字欠ケル。
(六) 婆心錄云、小本肱(ヒヂ)をと誤たりト。
(七) 原本、ウノ字カケル。

魚に喰あくはまの雜(八)炊　芭蕉
ちどり啼一夜〳〵に寒うなり　野坡
未進の高のはてぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて來て　野坡
屏風の陰にみゆるくわし盆　芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花ざかり　嵐雪
あざみや苣に雀鮨もる　利牛
片道は春の小坂のかたまりて　野坡
外をざまくに圍ふ相撲場　嵐雪
細〳〵と朔日ごろの宵の月　利牛
早稲も晩稲も相生に出る　野坡
泥染を長き流にのばすらん　嵐雪
あちこちすれば晝のかねうつ　利牛

(八) 原本雜水トスル、

隣より節々嫁を呼に來る　野坡
てう〳〵しくも譽るかいわり　嵐雪
黒谷のくちは岡(九)崎聖護院　利牛
五百のかけを二度に取けり　野坡
綱ぬきのいぼの跡ある雪(十)のうへ　嵐雪
人のさはらぬ松黒む也　利牛
雜役の鞍を下せば日がくれて　野坡
飯の中なる芋をほる月　嵐雪
漸と雨降やみてあきの風　利牛
鶏頭みては又鼾かく　野坡
名奉公のくるしき顔に墨ぬりて　嵐雪
抱揚る子の小便をする　利牛
くわた〳〵と河内の荷物送り懸　野坡
心みらるゝ箸のせんたく　嵐雪
壻が來て娘の世とは成にけり　利牛
ことしのくれは何も囉(モラハ)ぬ　野坡
金佛の細き御足をさするらん　嵐雪

(九) 原本譽るノる、聖護院ノ護院缺ケル。

(十) 原本雪のうへノの字、へ字カケル。

(十一) 原本嵐雪缺ケル。

此かいわいの小鳥皆よる
黍の穗は殘らず風に吹倒れ　野坡
馬場の喧嘩の跡にすむ月　嵐雪
弟はとう〳〵江戸で人になる　利牛
今に庄やのくちはほどけず　野坡
賣手よりうつてみせたるたゝき鉦　嵐雪
ひらり〳〵とはけきのふり出し　利牛
鎌倉の便きかせに走らする　野坡
かした處のしれぬ細引　嵐雪
獨ある母をすゝめて花の陰　利牛
まだかのこる正月の餅　野坡

ふか川に
まかりて
空豆の花さきにけり麥の緣　孤屋
晝の水鷄のはしる溝川　芭蕉

上張を通さぬほどの雨降て　岱水
そつとのぞけば酒の最中　利牛
寢處に誰もねて居ぬ宵の月　芭蕉
どたりと塀のころぶあきかぜ　孤屋
きり〳〵す薪の下より鳴出して　利牛
晩の仕事の工夫するなり　岱水
妹をよい處からもらはるゝ　孤屋
僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明がらすの啼わたり　岱水
家のながれたあとを見に行　利牛
納汁わかい者よりよくなりて　芭蕉
茶の買置をさげて賣出す　孤屋
この春はどうやら花の靜なり　利牛
かれし柳をかしみて今にをしたる　岱水
雪の跡吹はがしたる朧月　孤屋
ふとん丸げてものおもひ居る　芭蕉
不屈な隣と中のわるうなり　岱水

（十二）原本そつとノつカケル。

（十三）小本よくばりてニアヤマル。

はつち坊主を上へあがらす　利牛
泣事のひそかに出來し淺ぢふに　芭蕉
置わすれたるかねを尋ぬる　孤屋
着のまゝにすくんでねれば汗をかき　利牛
客を送りて提る燭臺　岱水
今のまに雪の厚さを指てみる　孤屋
年貢すんだとほめられにけり　芭蕉
息災に祖父のしらがのめでたさよ　岱水
堪忍ならぬ七夕の照り　利牛
名月のまに合せ度芋畑　芭蕉
すた〳〵いう（十四）うて荷ふ落鮎　孤屋
このごろは宿の通りもうすらぎし　利牛
山の根際の鉦かすか也　岱水
よこ雲にそよ〳〵風の吹出す　孤屋
晒の上にひばり囀る　利牛
花見にと女子ばかりがつれ立て　芭蕉
余のくさなしに葷たんぽゝ　岱水

（十四）原本名殘ノ裏ノウ字缺ケル。

芭蕉
孤屋
岱水
利牛

各九句

百韻

子は裸父はてゝれで早苗舟　利牛
岸のいばらの眞白に咲　野坡
雨あがり珠數懸鳩の鳴出して　孤屋
與力町よりむかふ西かぜ　利牛
竿竹に茶色の紬たぐりよせ　野坡
馬が離れてわめく人聲　孤屋

暮の月干葉の茄汁わるくさし　利牛
掃ば跡からぢゝめきの中でより出するりほあか　野坡
坊主になれど檀ちる也　孤屋
松坂や矢川へはいるうら通り　利牛
吹るゝ脾もつらき闇の夜　野坡
十二三辨の衣裳の打そろひ　孤屋
本堂はしる音はとろ〳〵　利牛
日のあたる方はあからむ竹の色　野坡
只綺麗さに口すゝぐ水　孤屋
近江路のうらの詞を聞初て　利牛
天氣の相よ三か月の照　野坡
生ながら直に打込ひしこ漬　孤屋
椋の實落る屋ねくさる也　利牛
帶賣の戻り連立花ぐもり　野坡
御影供ころの人のそはつく　孤屋
ほか〳〵と二日炎のいほひ出　利牛

ほろ〳〵あへの膳にこぼるゝ　孤屋
ない袖を振てみするも物おもひ　利牛
舞羽の糸も手につかず繰　野坡
段〳〵に西國武士の荷のつどひ　孤屋
尙きのふより今日は大旱　利牛
切蜣の喰倒したる植たばこ　野坡
くばり納豆を仕込廣庭　孤屋
瘧日をまぎらかせども待こゝろ　利牛
藤ですげたる下駄の重たき　野坡
つれあひの名をいやしげに呼まはり　孤屋
となりの裏の遠き井の本　利牛
くれの月横に負來る古柱　野坡
ずいきの長のあまるこつてい　孤屋
ひつそりと盆は過たる淨土寺　利牛
戸でからくみし居風呂の屋ね　野坡
伐透す椴と檜のすれあひて　孤屋
赤い小宮はあたらしき內　利牛

（十五）原本水○風呂トアル。

濱迄は宿の男の荷をかゝへ　野坡
師走比丘尼の諷(ウタ)の寒さよ　孤屋
餅搗の臼を年〳〵買かへて　利牛
天滿の狀を又忘れけり　野坡
廣袖をうへにひつぱる船の者(十六)　孤屋
むく起にして參る觀音　利牛
燃しさる薪(マキ)を尻手に指くべて　野坡
十四五兩のふりまはしする　孤屋
月花にかきあげ城の跡ばかり　利牛
弦打颪海(モツ)雲(クン)と桶　孤屋
ニ機嫌能かいこは庭に起かゝり　野坡
小晝のころの空靜也　利牛
椽端(ハナ)(十七)に腫たる足をなげ出して　孤屋
鍋の鑄かけを念入てみる　野坡
麥畑の替地に渡る傍示杭　利牛
賣手もしらず賴政の筆　孤屋
物毎も子持になればだゝくさに　野坡

(十六) 婆心錄ニ、小本者ヲ宿ト誤たりトアル。

(十七) 原本端ノ字缺ケル。

又御局の古着いたゞく　利牛
妓王寺のうへに上れば二尊院　孤屋
けふはけんかく寂しかりけり　野坡
薄雪のこまかに初手を降出し　利牛
一つくなりに鱈の雲(クモ)腸(ワタ)　孤屋
錢さしに菰引ちぎる朝の月　野坡
なめすゝきとる裏の塀(ヒ)あはひ　利牛
三ウ(十八)めを縫て無理に鳴する鵙の聲　孤屋
又だのみして美濃だよりきく　野坡
かゝさずに中の巳の日をまつる也　利牛
入來る人に味噌豆を出す　孤屋
すぢかひに木綿袷の龍田川　野坡
御茶屋のみゆる宿の取つき　利牛
ほや〳〵とどん(十九)どほこらす雲ちぎれ　孤屋
水菜に鯨まじる惣汁　野坡
花の内引越て居る樫(カタキ)原　利牛
尻輕にする返事聞よく　孤屋

(十八) 原本三ウノ三缺ケル。

(十九) 原本どんどちぎれノ濁點缺ケル。

おちかゝるうそ〳〵時の雨の音　野坡
入舟つゞく月の六月　利牛
拭立てお上（ウヘ）の敷居ひからする　孤屋
尚云つのる詞からかひ　野坡
名大水のあげくに畑の砂のけて　利牛
何年菩提しれぬ栃（ドチ）の木　孤屋
敷金に弓同心のあとを繼　野坡
丸九十日濕（ヒツ）をわづらふ　利牛
投打もはら立まゝにめつた也　孤屋
足なし棊盤よう借に來る　野坡
里離れ順禮引のぶら（二十）つきて　利牛
やはらかものを嫁の襟もと　孤屋
氣にかゝる朔日しまの精進（イモヒ）箸（ハシ）　野坡
うんじ果たる八專の空　利牛
丁寧に仙臺俵の口かゝり　孤屋
訴（二十一）訟が濟で土手になる筋　野坡
夕月に醫者の名字を聞はづり　利牛

（二十）標注ニ、一本ふらつきヲほらつきニ誤ルトアル。

（二十一）原本訴詔トアル。

包で戻る鮭のやきもの　孤屋
名ウデウ定免（メン）を今年の風に欲ほりて　野坡
もはや仕事もならぬおとろへ　利牛
暑（ヒアツ）病（ヤミ）の殊（コトニ）土用をうるさがり　孤屋
幾月ぶりでこゆる逢坂　野坡
減（ヘリ）もせぬ（二十二）鍛冶屋のみせの店さらし　利牛
門建直す町の相談　孤屋
彼岸過一重の花の咲立て　野坡
三（二十三）人ながらおもしろき春　執筆

（二十二）原本減（ヘリ）もノもヲオトス。

（二十三）原本三人ノ三ノ字缺ケル。

春之部發句

立春

蓬萊に聞ばや伊勢の初便　芭蕉
東雲やまひら戸はづすかざり松　濁子
みちのくのけふ關越ん箱の海老　杉風
春や祝ふ丹波の鹿も歸とて　去來
刀さす供もつれたし今朝の春　正秀

京膳所

いそがしき春を雀のかきばかま　大阪　洒堂
喰つみや木曾のにほひの檜物　岱水
猶いきれ門徒坊主の水祝ひ　沾圃
目下にも中の詞や年の時宜　孤屋
初日影我莖立とつまればや　利牛
長松が親の名で來る御慶哉　野坡

梅

梅一木つれ〴〵草の姿かな　露沾
むめ咲や臼の挽木のよきまがり　曲翠
むめが香の筋に立よるはつ日哉　支考

窓のうちをみこみて

むめちるや糸の光の日の匂ひ　伊賀　土芳
梅さきて湯殿の崩れなほしけり　利牛
赤みその口を明けりむめの花　游刀
みな〳〵に咲そろはねど梅の花　野坡

紅梅は娘すまする妻戸哉　杉風

（二十四）七ノ字缺ケル。

をなごどもの（二十四）七くさはやすをみて

とばしるも顔に匂へる薺哉　其角
七草や粧ひしかけて切刻み　野坡
うちむれてわかな摘野に脛かゆし　仙杖

洛よりの文のはしに

朧月一足づゝもわかれかな　僧　去來
大はらや蝶の出てまふ朧月　丈艸
おぼろ月まだはなされぬ頭巾かな　仙花

深川の會に

長閑さや寒の殘りも三ヶ一　大阪　利牛
十五日立や睦月の古手賣　之道
猫の戀初手から鳴て哀也　野坡
ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶哉　其角

鶯

うぐひすにほうと息する朝(アシタ)哉　嵐雪
鶯に薬をしへん聲の文(アヤ)　其角
うぐひすの聲に起行雀かな　桃隣
うぐひすや門はたま〳〵豆腐賣(二十五)　野坡
鶯の一聲も念を入にけり　利牛

（二十五）原本豆麩賣トスル。

柳

こねりをもへらして植し柳かな　湖春
障子ごし月のなびかす柳かな　素龍
五人ぶちとりてしだるゝ柳かな　野坡
せきれいの尾は見付ざる柳かな　一風
町なかへしだるゝ宿の柳かな　利牛
傘に押わけみたる柳かな　芭蕉

椿

土はこぶ籮(ラヽ)にちり込椿かな　孤屋

枝長く伐らぬ習を椿かな　湖春
念入て多かうつぼむ椿かな　曲翠
鋸にからきめみせて花つばき　嵐雪
鳥の音も絶ず家陰の赤椿　支考
はき掃除してから椿散にけり　野坡

花

うへの〳〵花見にまかり侍しに、人〳〵幕打さはぎ、もの〳〵音小うたの聲さま〴〵なりにける。かたはらの松かげをたのみて

四つごきのそろはぬ花見心哉　芭蕉
めづらしや内で花見のはつめじか　杉風
うか〳〵と來ては花見の留守居哉　丈艸

何がしのからの殿の花見に侍りて

中下もそれ相應の花見かな　素龍
花守や白きかしらを突あはせ　去來

朝めしの湯を片膝や庭の花　孤屋
あすと云花見の寄のくらさ哉　荊口
だかれてもをのこぐいきる花見哉　斜嶺
柿の袈裟ゆより直すや花の中　北枝
牡丹すく人もや花見とはさくら　湖春
あだなりと花に五戒の櫻かな　其角
花はよも毛虫にならじ家櫻　嵐雪
やまざくらちるやや小川の水車　智月
老僧も袈裟かつぎたる花見哉　之道
誰母ぞ花に珠數くる遅ざくら　祐甫
山櫻小川飛こすをなご哉　普全
昆布だしや花に氣のつく庫裏坊主　利牛
おちつきは魚やまかせや櫻がり　同
折かへる櫻ふぶくや臺所　孤屋
祭まであそぶ日なくて花見哉　野坡
食の時みなあつまるや山ざくら　同

上巳

帶ほどに川のながるゝ墟干哉　沾徳
晝舟に乘るやふしみの桃の花　桃隣
かつらぎの神はいづれぞ夜の雛　其角
鬼の子に餅を居るもひひな哉　如行
日半路をてられて來るや桃の花　野坡
麻の種毎年踏で桃の華　利牛
蘩垣や馬の貌かくもゝの花　孤屋
青柳の泥にしだるゝ墟干かな　芭蕉

題しらず

瀧つぼに命打こむ小あゆ哉　嵯峨田夫　爲有
春雨や蜂の巣つたふやねの漏　芭蕉
散殘るつゝじの蕊や二三本　子珊
ほそ〳〵とごみ焼門のつばめ哉　伊賀　怒誰
鳥の行やけのゝ隈や風の末　猿雖
氣相よき青葉の麥の嵐かな　仙華

旅行にて

法度場の垣より内はすみれ哉　野坡

此集いまだ半なる比、孤屋旅立事ありけるに、品川までみ送りて

雲霞どこまで行もおなじ事　野坡
梅さくらふた月ばかり別れけり　利牛

夏之部發句

首夏

壚うをの裏ほす日也衣がへ　嵐雪
衣がへ十日はやくば花ざかり　野坡
綿をぬぐ旅ねはせはし衣更　九節
雀よりやすき姿や衣がへ　雪芝
花の跡けさはよほどの茂りかな　子珊
扇屋の暖簾白し衣がへ　利牛

うの花

卯の花やくらき柳の及ごし　芭蕉
うのはなの絶間たゝかん闇の門　去來

旅行に

うの花に蘆毛の馬の夜明哉　許六
卯の花に扣ありくやかつらかけ　支考

題しらず

棹の歌はやうら涼しめじか舟　湖春
髭宗祇池に蓮ある心かな　素堂
うぐひすや竹の子藪に老を鳴　芭蕉

郭公

聞までは二階にねたりほとゝぎす　桃隣
ほとゝぎす一二の橋の夜明かな　其角
行燈を月の夜にせんほとゝぎす　嵐雪（二十六）
挑燈の空に詮なしほとゝぎす　杉風

（二十六）原本杉風ノ杉ヲ缺ケル。

木がくれて茶摘も聞やほとゝぎす
春雲や舟ながしやる子規
時鳥啼〳〵風が雨になる
子規顔の出されぬ格子哉

芭蕉
素龍
利牛
野坡

麥

柿寺に麥穂いやしや作どり
麥の穂と共にそよくや筑波山
麥跡の田植や遲き螢どき
翁の旅行を川さきまで送りて
刈こみし麥の匂ひや宿の內

(二十七)みの
荊口
千川
許六
利牛
野坡

おなじ時に
麥畑や出ぬけても猶麥の中
おなじこゝろを
浦風やむらがる蟬のはなれぎは

端午

岱水

(二十七)原本みのノみ缺ケル。

五月雨や傘に付たる小人形

大阪 其角

さうぶ懸てみばやはつきの風の色

酒堂

五日迄水すみかぬるあやめかな

桃隣

文もなく口上もなし粽五把

嵐雪

みをのやは首の骨こそ甲なれ

仙花

帷子のしたぬぎ懸る袷かな

素龍

夏旅

並松をみかけて町のあつさかな

臥高

枯柴に畫貌あつし足のまめ

斜嶺

二三番鷄(より)は鳴どもあつさ哉

長崎 魯町

はげ山の力及ばぬあつさかな

猿雖

するが地や花橘も茶の匂ひ

芭蕉

此句は嶋田よりの便に

五月雨

さみだれやとなりへ懸る丸木橋

素龍

五月雨の色やよど川大和川　桃隣
さみだれに小鮒をにぎる子供哉　野坡
五月雨や露の葉にもる蒻薩（ヤマゴドウ）　嵐蘭
この句は桃隣より書てこしぬ
五月雨や顔も枕もものゝ本　岱水

（二十八）原本よころふノ○ふノ濁點缺ケル。標注ニ、川中ノ句ハ公羽（コウウ）ノ文字ヲ讀違ヘテ、翁ト素龍書損ゼシヨシ。猿廻シ集ニ見エタリトアル。
（二十九）原本長崎ノ長○缺ケル。

涼

川中の根木によ（二十八）ころぶすゝみ哉　公羽（二十八）
月影にうごく夏木や葉の光り（二十九）　女　かな
涼しさよ塀にまたがる竹の枝　長崎　卯七
行燈をしひてとらするすゞみかな　探芝
崎風はすぐれて涼し五位の聲　智月
すゞしさをしれと杓（ヒシヤク）の雫かな　備前　兀峯
すゞしさや浮洲のうへのざこくらべ　去來
夕すゞみあぶなき石にのぼりけり　野坡
三か月の隱にてすゞむ哀かな　素堂

（三十）原本乙女ノ乙○ノ字缺ケル。
（三十一）小本雨着○こはがるトアヤマル。
（三十二）原本みの○ノみノ字全クカケル。
（三十三）原本團○賣トアル。

題しらず

橘や定家机のありどころ　杉風
熨斗むくや磯菜すゞしき嶋がまへ　正秀
世の中や年貢畠のけしの花　里東
早乙女（三十）にかへてとりたる菜飯哉　嵐雪

木曾路にて

やまぶきも巴も出る田うへかな　許六
ひるがほや雨降たらぬ花の貌　智月
はへ山や人もすさめぬ生ぐるみ　北鯤
曉のめをさまさせよはすの花　乙州
雨乞の雨氣こはがるかり着哉（三十一）　丈艸
螢みし雨のタや水葵　仙花
一いきれ蝶もうろつくわか葉哉　楚舟（三十二）
なりかゝる蟬がら落す李かな　殘香（みのさが）
猪の牙にもげたる茄子かな　爲有
團扇賣侍町のあつさかな（三十三）　怒風
けうときは鷲の栖（スミカ）や雲の峯　祐甫

一枝はすけなき竹のわかば哉　仙化

竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき　嵐雪

さるべき人僕が酒をたしむ事をかたく戒め給ひて諾せしむ。しかるにある會にそれをよく知てあらきあはもりなど名あるかぎりを取出てあるじせられければ、汗をかきて

改て酒に名のつくあつさ哉　利牛

ある人の別墅にいざなはれ、盡日打和て物がたりし其夕つかた外のかたをながめ出して

行雲をねてゐてみるや夏座敷　野坡

俳諧炭俵集　卷下

龜之部

秋のあはれいづれか〳〵の中に、月を翫で時候の序をえらばず。

名月

明月や見つめても居ぬ夜一よさ　湖春

名月や椽(エン)取まはす黍の虚(カラ)　去來

家買てことし見初る月夜哉　荷兮

名月や誰吹起す森の鳩　洒堂

松陰や生(イケ)船揚に江の月見　里東

もち汐の橋のひくさよけふの月　利牛

家こぼつ木立も寒し後の月　其角

むさしの仲秋の月はじめて見侍て、望峯ノ不盡筑波を

明月や不二みゆるかとするが町　素龍

七夕

笹のはに枕付てやほしむかへ　其角
星合にもえ立紅ゃかやの縁　孤屋
七夕やふりかはりたるあまの川　嵐雪

盂蘭盆

とうきびにかげろふ軒や玉まつり　酒堂
踊るべきほどには醉て盆の月　江戸　李由
盆の月ねたかと門をたゝきけり　野坡

朝貌

閉關

朝貌や晝は錠おろす門の垣　芭蕉
朝貌や日傭出て行跡の垣　利合
てじかなと朝貌はは寸柳哉　湖春

秋虫

年よれば聲はかるゝぞきりぐす　大津　智月

悔いふ人のとぎれやきりぐす　丈中
蟷螂にくんで落たるぬかごかな　さが　爲有
こうろぎや箸で追やる膳の上　孤屋

鹿

友鹿の啼を見かへる小鹿かな　車來（三十四）
人のもとめによりて
鹿のふむ跡や硯の躬恒形（ガタ）　素龍
旅行のとき
近江路やすがひに立る鹿の長（タケ）　土芳

草花

宮城野の萩や夏より秋の花　桃隣
花すゝきとらへちからや村すゞめ　野童
片岡の萩や刈ほす稻の端（ハシ）　猿雖
蘆の穗や貌撫揚る夢ごゝろ　丈草
なにはづにて

（三十四）原本車來ノ來缺ケテ分ラズ。○

蘆のほに箸うつかたや客の膳　去來
　女中の茸狩をみて
茸狩や鼻のさきなる歌がるた　其角
　園菊
菊畑おくある霧のくもり哉　杉風
紺菊も色に呼出す九日かな　桃隣

　秋植物

柿のなる木を子どもの寄どころ　利牛
落栗や谷になかるゝ蟹の甲　祐甫
秋風や茄子の數のあらはるゝ　木白
箕に干て窓にとちふく綿の桃　孤屋

とうがらしの名を南蠻がらしといへるは、かれが治世南ばんにてひさしかりしゆゑにや。未詳。ほうづき、天のぞき、そら見、八ツなりなどいへるは、をのがかたちをこのめる人々のもてあそびて付たるなるべし。みなやさしからぬ名目（モク）は汝がむまれ付のふつゝかなれば、天資自

（三十五）原本ますらほノほ。ほ缺ケル。（三十六）原本比。ノ字缺ケル。

然の理、さら〳〵恨むべからず。かれが愛をうくるや、石臺にのせられて、竹椽のはしのかたにあろは、上々の仕合なり。ともすればすりばちのわれ、そこぬけのつるべに土かはれて、やねのはづれ、二階のつま、物ほしのひかげをたのめるなど、あやうくみえ侍を、朝貌のはかなきたぐひにはたれも〳〵おもはず。大かたはかつら髭、つり鬚（ヒゲ）のますらをにかしづかれて、びんぼ樽の口をうつすみさかなとなり、不食不菜のときふと取出され、おほくはやつこ豆麩（三十六）の比、紅葉の色をみするを榮花の頂上とせり。かくはいへどある人北野もうでの歸さに、みちのほとりの小童にこがね一兩くれて、なんぢが青々とひとつみのりしを所望せし事ありといへば、いやしめらるべきにもあらず。しかしいまはその人〳〵も此世をさりつれば、いよ〳〵愛をもたのむべからず。からきめもみすべからすと小序をしかいふ。

題しらず

石臺を

終にねこぎや　唐がらし　野坡

相撲取ならぶや秋のからにしき（三十七）
居風呂の下や案山子の身の終
礎ひとりよき染物の匂ひかな
秋のくれいよ〳〵かろくなる身かな
茸狩や黄蕈（イグチ）も兒は嬉し貌
夕貌の汁は秋しる夜寒かな
くる秋は風ばかりでもなかりけり
秋風に蝶やあぶなき池の上
庖丁の片袖くらし月の雲

嵐雪
丈草
洒堂
荷兮
利合
支考
北枝
依々檜
其角

（三十七）原本終ノ字カケ。

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ
市中や木の葉も落（オチ）ずふじ颪
多枯の磯に今朝みるとさか哉

其角
桃隣
芭蕉

櫻木や孤張まはす多がまへ
蜘の巣のきれ行多や小松原
刈蕎麥の跡の霜ふむすゞめ哉
凩の藪にとゞまる小家かな
初霜や猫の毛も立臺所（ツウ）
凩や眇（マクヲ）しげき猫の面

支梁
斜嶺
桐奚
殘香
楚舟
八桑

時雨

芋喰の腹へらしけり初時雨
黒みけり沖の時雨の行ところ

桃隣
游刀

（三十八）原本荊口ノ口ニカケテ分ラズ。
（三十九）原本丈卯ノ卯字カケテ分ラズ。

わが茅屋にまねきて
芭蕉翁を

もらぬほど今日は時雨よ草の庵
在明となれば度〳〵しぐれかな

斜嶺
許六

旅ねのころ

小夜霙となりの臼は挽やみぬ　野坡

大根引といふ事を

鞍壺に小坊主乗るや大根引　芭蕉

鉢まきをとれば若衆ぞ大根引　野坡

神送荒たる宵の土大根　洒堂

さむさを下の五文にすゑて

人聲の夜半を過る寒さ哉　野坡

この比は先挨拶もさむさ哉　示蜂

蕎麥切に吸物もなき寒さ哉　利牛

足もともしらけて寒し冬の月　我眉

魚店や莚うち上て冬の月　里東

右の二句はふか川の庵へ

おとづれし比、他國よりの狀の

(四十)はしに有つるをみて

今爰に出しぬ。

(四十)原本はしノは缺ケテ分ラズ。

雪

はつ雪にとなりを顔で教けり　野坡

初雪の見事や馬の鼻ばしら　利牛

はつ雪や塀の崩れの蔦の上　買山

雪の日に庵借(カサフ)ぞ(四十一)鷦(ミソ)鷯(サヾイ)　依々

雪の日やうすやうくもるうつし物　猿雖

冬の夜飯道寺にて

杉のはの雪朧なり夜の鶴　支考

朱の鞍や佐野へわたりの雪の駒　北枝

はつ雪や先馬やから消そむる　許六

炭賣の横町さがる雪吹哉　湖夕

海山の鳥啼立る雪吹かな　乙刕

江の舟や曲(ヘツイ)突にとまる雪の鷺　素龍

(四十一)原本鷦鷯(ミヽサヽイ)トスル。

題不知

かなしさの胸に折込枯野かな　羽黒亡人　呂丸
寒菊や粉糠（ヌカ）のかゝる臼の端　芭蕉
禪門の革足袋おろす十夜哉　許六
御火焼の盛物と見るな村がらす　智月
白うをのしろき匂ひや杉の箸　之道
椙の火やあかつき方の五六尺　丈艸
庚申やことに火燵のある座敷　殘香
誰と誰が縁組すんでさと神樂　其角
海へ降霰や雲に波の音　仝

すゝはき

煤はきは己が棚つる大工かな　芭蕉（四十二）
煤拂しやうじをはくは手代かな　万乎
餅つきや元服さする草履取　野坡

（四十二）原本万乎ノ乎ヲ缺ケテ分ラズ。○

山臥の見事に出立師定哉　嵐雪
待春や氷にまじるちりあくた　智月

歳暮

このくれも又くり返し同じ事　杉風
はかまきぬ聟入もあり年のくれ　李由
なしよせて鶯一羽とし〴〵よ　智月
鍋ぶたのけば〳〵しさよ年のくれ　孤屋
としの夜は豆はしらかす俵かな　猿雖
年のくれ互にこすき銭づかひ　野坡

芭蕉よりの文に、くれの事

いかゞなど在し其かへり事に

爪取て心やさしや年ごもり　素龍

行年よ京へとならば狀ひとつ　湖春

俳諧秋之部

秋の空尾上の杉に離れたり　其角
おくれて一羽海わたる鷹　孤屋
朝霧に日傭揃る貝吹て　仝
月の隱るゝ四扉の門　其角
祖父が手の火桶も落すばかり也　仝
つたひ道には丸たころばす　孤屋
下京は宇治の糞(コエ)船さしつれて　仝
坊主の着たる蓑はおかしき　其角
足輕の子守して居る八ッ下り　孤屋
息吹かへす霍亂の針　其角
田の畔(クロ)に早苗把(タバネ)て投て置　孤屋
道者のはさむ編笠の節　其角
行燈の引出(ヒキダシ)さがすはした錢　孤屋
顔に物着てうたゝねの月　其角
鈴繩に鮭のさはればひゞく也　孤屋

鴈の下たる筏ながるゝ　其角
貫之の梅津桂の花もみぢ　孤屋
むかしの子ありしのばせて置　其角
いさ心跡なき金のつかひ道　仝
宮の縮のあたらしき内　孤屋
夏草のぶとにさゝれてやつれけり　其角
あばたといへば小僧いやがる　孤屋
年の豆蜜柑の核(サネ)も落ちりて　其角
帶ときながら居風呂をまつ　孤屋
君來ねばこはれ次第の家となり　其角
稗と鹽との片荷つる籠　孤屋
辛崎へ雀(四十三)のこもる秋のくれ　其角
北より冷る月の雲行(キ)　孤屋
紙燭して尋て來たり酒の錢　其角
上塗なしに張ておく壁　孤屋
小(名ウ)栗讀む片言まぜて哀なり　其角
けふもたらつく浮前のふね　孤屋

（四十三）標注ニ、小本雀ヲ○薄ニアヤマルト。

孤屋旅立事出來て、(四十四)
洛へのぼりけるゆゑに、
今四句未滿にして吟
終りぬ。

其角
孤屋
各十六句

天野氏興行

道くだり拾ひあつめて案山子哉　桃隣
どんどと水の落る秋風　野坡
入月に夜はほんのりと打明て　利牛
塀の外まで桐のひろがる　桃隣
銅壺よりなまぬる汲んでつかふ也　野坡

(四十四)原本出來ノ二字ヒドク缺ケル。

(四十五)原本身躰トスル。

つよう降たる雨のついやむ　利牛
瓜の花是からなんぼ手にかゝる　桃隣
近くに居れど長谷をまだみぬ　野坡
年よりた者を常住ねめまはし　利牛
いつより寒い十月のそら　桃隣
臺所けふは奇麗にはき立て　野坡
分にならゝ嫁の仕合　利牛
はんなりと細工に染る紅うこん　桃隣
鑓持ばかりもどる夕月　野坡
時ならず念佛きこゆる盆の内　利牛
鳴まつ黒にきてあそぶ也　桃隣
人の物負ねば樂な花ごゝろ　野坡
もはや彌生も十五日たつ　利牛
より平の機に火桶はとり置て　桃隣
むかひの小言たれも見廻す　野坡
買込だ米で身代(四十五)たゝまるゝ　利牛
歸るけしきが燕ざはつく　桃隣

此度の薬はき〻し秋の露　野坡
杉の木末に月かたぐ也　利牛
同じ事老の咄しのあくどくて　桃隣
だまされて又薪（マキ）部屋に待　野坡
よいやうに我手に占（サン）を置てみる　利牛
しやうしんこれ（四十六）はあはぬ商（ヒ）　桃隣
帷子も肩にかゝらぬ暑さにて　野坡
京は惣別家に念入　利牛
名焼物に組合たる富田舩（タビ）　桃隣
隙を盗んで今日もねてくる　利牛
髪置は雪踏とらすする思案にて　野坡
先沖までは見ゆる入舟　桃隣
内てより菜（サイ）がなうても花の陰　利牛
ちつとも風のふかぬ長閑さ　野坡

（四十六）原本朱書入これはトスル。○原字たトこトマギレヤスイ。

（四十七）原本、廿日ノ廿ノ字缺ケテ不明。

神無月廿日（四十七）
ふか川にて卽興

振賣の鴈あはれ也えびす講　芭蕉
降てはやすみ時雨する軒　野坡
番匠が樫の小節を引かねて　孤屋
片はげ山に月をみるかな　利牛
好物の餅を絶さぬあきの風　野坡
割木の安き國の露霜　芭蕉
網の者近づき舟に聲かけて　利牛
星さへ見えず二十八日　孤屋
ひだるきは殊軍の大事也　芭蕉
淡氣の雪に難談もせぬ　野坡
明しらむ籠挑灯を吹消して　孤屋
肩癖にはる湯屋の膏藥　利牛
おきの干葉刻もうはの空　野坡
馬に出ぬ日は内で戀する　芭蕉
紬（カセ）買の七つさがりを音づれて　利牛

塀に門ある五十石取
此嶋の餓鬼も手を摺月と花
砂に暖（スクミ）のうつる青草
新畠（ハタ）の糞（コヘ）もおちつく雪の上
吹とられたる笠とりに行
川越の帯しの水をあぶなが
平地の寺のうすき藪垣
干物を日向の方へいざらせて
壚出す鴨の苞（ヅト）ほどくなり
算用に浮世を立る京ずまゐ
又沙汰なしにむすめ逢（ヨロコブ）
どたくたと大晦日も四つのかね
無筆のたのむ状の跡さき
中よくて傍輩合の借りいらひ
壁をたゝき寝（四十九）せぬ夕月
風（ウ）やみて秋の鶫（四十八）の尻さがり
鯉の鳴子の綱をひかゆる

孤屋　芭蕉　野坡　孤屋　利牛　孤屋　芭蕉　野坡　利牛　孤屋　芭蕉　孤屋　利牛　野坡　孤屋　芭蕉　野坡　利牛　孤屋

（四十八）原本とたくたノど。缺ケル。たのむノむ、借りいらゐノ借ノ字カケル。

（四十九）原本鶫、尻ノ字カケル。

（五十）原本、標注、校正、ちらほらトアル。

（五十一）原本九句ノ二字缺ケル。

ちらはらと米の揚（アゲ）場の行戻り
目黒まゐりのつれのねぢみやく
どこもかも花の三月中時分
輪炭のちりをはらふ春風

芭蕉　野坡　孤屋　利牛

各九句（五十二）

雪の松をれ口みれば尚寒し
日の出るまへの赤き冬空
下（ゲ）肴を一舟濱に打明て

杉風　孤屋　芭蕉

あいだとぎる〳〵大名の供
身にあたる風もふは〳〵薄月夜(五十二)
栗をかられてひろき畠地
熊(ウ)谷の堤きれたる秋の水
箱こしらへて鰹節賣る
二三疊寐所もらふ門の脇
馬の荷一物のさはる干もの
竹の皮雪踏に替へる夏の來て
稻に日のさす雨のはら〳〵
手前者の一人もみえぬ浦の秋(五十四)
めつたに風邪のはやる盆過
寄〳〵の月をかこちて旅大工
脊中へのぼる兒をかはゆがる
茶むしろのきはづく上に花ちりて
川からすぐに小鮎いらする
朝曇はれて氣味よき雉子の聲(名)
脊戶へ廻れば山へ行みち

(五十二)
原本月夜ノ月ノ字缺ケル。

(五十三)
原本門の脇ノ門、夏の來てノ夏ノ字カケル。

(五十四)
原本タバ風トスル。

孤屋　子珊
曾良　利牛
桃隣　桃隣
依々　沾圃
沾圃　子珊
利牛　利牛
杉風　杉風
石菊　石菊
野坡　野坡
利合　利合
依々　依々
桃隣　桃隣
子珊　子珊
利牛　曾良
杉風　杉風
桃隣　桃隣
岱水　岱水

(五十五)
原本食トアル。

物思ひたゞ欝〳〵と親がゝり
取集めてはおほき精進日(イモヒ)
餅米を搗て俵へはかりこみ
わざ〳〵わせて藥代の礼
雪舟でなくばと自慢こきちらし
となりへ行て火をとりて來る(五十五)
又けさも佛の飯で埒を明
損ばかりして賢こがほ也
大坂の人にすれたる多の月
酒をとまれば祖母の氣に入
すゝけぬる御前の箔のはげかゝり
次の小部屋でつにむせる聲
約束にかゞみて居れば蚊に喰れ
七ッのかねに駕籠呼に來る
花の雨あらそふ内に降出して
男まじりに蓬そろゆる

孤屋
曾良
桃隣
依々
沾圃
子珊
利牛
杉風
野坡
利合
依々
桃隣
岱水

（五十六）原本岱水ノ二字カケル。

杉風　五
狐屋　二
芭蕉　一
子珊　五
桃隣　四
利牛（五十六）　三
岱水　三

野坡　三
沾圃　二
石菊　二
利合　二
依々　二
曾良　二

撰者芭蕉門人

志太氏　野坡
小泉氏　孤屋
池田氏　利牛

元祿七歲次甲戌
六月廿八日

俳諧炭俵下卷之終

京寺町通　井筒屋庄兵衞
江戸白銀丁　本屋藤助

續猿蓑

上

續猿蓑集　卷之上

（一）此ノ卷ニハ芭蕉ノ添削シタ草稿ガアル。ソノ模刻ハ李東ノ「八九間雨柳」トイフ書ニ出テヰル。尚沼波氏ノ「芭蕉全集」五四〇頁ノ頭註ヲ參照セラレタイ。

芭蕉

（一）八九間空で雨降る柳かな
春のから崎ほる聲沾圃
初荷とる馬子もこのみの羽織馬莧
きて
内はどさつく晩のふるまひ里圃
きのふから日和かたまる月の色沾
狗脊かれて肌寒うなる蕉
澁柿もこことしは風に吹れたり里
孫か跡とる祖父の借錢莧
脇指に替てほしかる旅刀蕉
煤をしまへはや餅の段沾
約束の小鳥一さけ賣にきて莧
十里はかりの余所へ出かゝり里
笹の葉に小路埋ておもしろき沾

あたまうつなと門の書つけき
いづくへか後は沙汰なき甥坊主ヒ蕉
やつと聞出す京の道づれ里
有明におくるゝ花のたてあひて莧
見事にそろふ粒のはへ口沾
春無盡まづ落札が作太夫蕉
伊勢の下向にべつたりと逢莧
長持に小挙の仲間そは〳〵と沾
くわらりと空の晴る青雲里
禪寺に一日あそぶ砂の上蕉
槻の角のはてぬ貫穴莧
濱出しの牛に俵をはこぶ也沾
なれぬ嫩にはかくす內證蕉
月待に傍輩衆のうちそろひ里
籬の菊の名乘さま〴〵莧
むれて來て栗も榎もむくの醉沾

伴僧はしる駕(ノリモノ)のわき　蕉
削(ソグ)やうに長刀坂の冬の風　里
まぶたに星のこぼれかゝれる　莧
引立てむりに舞するたをや　蕉
そつと火入におとす薫かさ　沾
花ははや殘らぬ春のたゞくれて　莧
瀬かしらのほるかけろふの水　里

馬莧

雀(カラ)の字や揃うて渡る鳥の聲　沾圃
てり葉の岸のおもしろき月　里圃
立家を買てはいれは秋暮て　莧
ふつ〳〵なるをのぞく甘酒　沾
霜氣たる蕪喰ふ子ども五六人　里
莚をしいて外の洗足

(二)標注云、奉公ふりニ有ふり書損ニヤトアル。

悔しさはけふの一歩の見そこなひ　莧
請狀すんで奉公ぶりする　沾
よすぎたる茶前の天氣きづかはし　里
(二)有ふりしたる國方の客　莧
何夏もなくてめでたき駒迎　沾
風にたすかる早稲の穂の月　里
臺所秋の住居に住かへて　莧
座頭のむすこ女房呼けり　沾
明はつる伊勢の辛洲(カラス)のとし籠り　里
蓑はしらみのわかぬ一德　莧
俵米もしめりて重き花盛　沾
春靜なる竿の染纑(ぶと)　里
鶯の路には雪を掃殘し　莧
しなぬ合點で煩うて居る　沾
年〳〵に屋うちの者と中惡く　里
三崎敦賀の荷のかさむ也　莧

汁の實にこまる茄子の出盛て　沾
あからむ麥をまづ刈てとる　里
口〳〵に寺の指圖を書直し　荳
殿のお立のあとは淋しき　沾
錢かりてまだ取つかぬ小商　里
卑下して庭によい料理　荳

肌入て秋になしけり暮の月　ふくく　沾
顏にこぼるゝ玉笹の露　里
此盆は實の母のあと問て　荳
有付て行出羽の庄內　沾
直のしれた帷子時のもらひ物　里
聞て氣味よき杉苗の風　荳
花のかけ巢を立雉子の舞　沾
あら田の土のかわくかけろふ　かへり　里

（三）標注ニ、原板頭ニトアリ。一本頃トアリトアル。

いさみ立鷹引すゆる嵐かな　里圖
多のまさきの霜ながら飛　沾圖
大根のそだゝぬ土にふし　芭蕉

上下ともにくれて　朝茶のむ秋　馬荳
町切に月見の頭の集め錢　（三）　沾
荷がちら〳〵と通る馬次　里
知恩院の替りの噂極りて　荳
さくらの後は楓わかやく　沾
狙の鱸に水をかけながし　里
日利で家はよい暮しなり　荳
狀箱を駿河の飛脚詩とりて　沾
まだ七つにはならぬ日の影　里
草の葉にくぼみの水の澄ちぎり　荳
伊駒氣づかふ綿とりの雨　沾
うき旅は鴈とつれ立渡り鳥　里

（四）標注云、一本漬ニ作ル。原板、古集辯共ニ賣ルニ作ルトアル。

有明高う明はつるそら　莧
柴舟の花の中よりつつと出て　沾
柳の傍（ソバ）へ門をたてけり　里
百姓になりて世間も長閑　莧
さよ
ごまめを膳にあらめ片菜　沾
（四）賣物の澁紙つゝみおろし置　里
けふのあつさはそよりともせぬ　莧
砂を這ふ棘の中の絡線（ギス）の聲　沾
別を人がいひ出せば泣　里
火燵の火いけて勝手をしづまらせ　莧
一石ふみし碓（カラウス）の米　沾
折〳〵は突目の起る天氣相　里
仰（グウ）に加減のちがふ夜寒さ　莧
月影にことしたばこを吸てみる　沾
おもひのまゝに早稲で屋根ふく　里

手拂に娘をやつて娵のさた　莧
參宮の衆をこちで仕立る　沾
花のあと躑躅のかたがおもしろい　里
寺のひけたる山際の春　莧
冬よりはすくなうなりし池の鴨　沾
一雨降てあたゝかな風　里

猿蓑にもれたる霜の松露哉　沾圃
日は寒けれど靜なる岡　芭蕉
水かるゝ池の中より道ありて　支考
篠竹まじる柴をいたゞく　惟然
鷄があがるとやがて暮の月　蕉
通りのなさに見世たつる秋　考
盆しまひ一荷で直ぎる鮨の魚　然
晝寐の癖をなほしかねけり　蕉

聟が來てにつともせずに物語　考
中國よりの狀の吉左右　然
朔日の日はどこへやら振舞れ　蕉
一重羽織が失てたづぬる　考
きさんじな青葉の比の椴楓　然
山に門ある有明の月　蕉

初あらし畑の人のかけまはり　考
水際光る濱の小鰯　然
見て過る紀三井は花の咲かゝり　蕉
荷持ひとりにいとゞ永き日　考
(五)こち風の又西に成北になり　然
わが手に脉を大事がらるゝ　蕉
後呼の内儀は今度屋敷から　考
喧嘩のさたもむざとせられぬ　然
大せつな日か二日有暮の鐘　蕉

(五)標注云、一本こちニアヤマル。

雪かき分し中のどろ道　考
來る程の乘掛は皆出家衆　然
奥の世並は近年の作　蕉
酒よりも肴のやすき月見　考

赤鷄頭を庭の正面して　然
定らぬ娘のこゝろ取しづめ　蕉
寐汗のとまる今朝がたの夢　考
鳥籠をづらりとおこす松の風　然
大工つかひの奥に聞ゆる　蕉
米搗もけふはよしとて歸る也　考
から身で市の中を押あふ　蕉
此あたり弥生は花のけも　然
鴨の油のまだぬけぬ春なくて　考

今宵賦　野盤子

今宵は六月十六日のそら水にかよひ、月は東方の亂山にかゝげて、衣裳に湖水の秋をふくむ。されば今宵のあそびはじめより、尊卑の席をくばらねど、しば〳〵酌てみだらず。人そこ〳〵に涼みふして、野を思ひ山をおもふ。たま〳〵かたりなせる人さへ、さらに人を興せしめむとにあらねば、あながちに辯のたくみをもとめず。唯萍の水にしたがひ、水の魚をすましむるたとへにぞ侍りける。阿叟は深川の草庵に四年の春秋をかさねて、ことしはみな月さつきのあはひを渡りて、伊賀の山中に父母の古墳をとふらひ、洛の嵯峨山に旅ねして、賀茂祇園の涼みにもたゞよはす。かくてや此山に秋をまたれけむと思ふに、さすが湖水の納涼もわすれがたくて、また三四里の暑を凌て、爰に草鞋の鴛をとゝむ。今宵は菅沼氏をあるじとして、僧あり俗あり、俗にして僧に似たるものあり。その交のあはきものは砂川の岸に小松をひたせるがごとし。深からねばすこからす。かつ味なうして人にあかるゝなし。幾年なつかしかりし人〳〵のさしむきてわするゝにたれど、おのづからよろこべる色人の顔にうかびて、おぼへず鷄啼て月もかたふきけるや。まして魂祭る比は阿叟も古さとの方へと心ざし申されしを、支考は伊勢の方に住ところ求て、時雨の比はむかへむなどもおもふなり。しからば湖の水鳥のやがてばら〳〵に立わかれて、いつか此あそびにおなじからむ。去年の今宵は夢のごとく、明年はいまたきたらす。

今宵の興宴何ぞあからさまならん。そゞろに醉てねふるものあらは、罰盃の數に水をのませんとたはふれあひぬ。

夏の夜や崩て明し冷し物　　芭蕉
露はらり〳〵と蓮の椽先　　曲翠
鶯はいつその程に音を入て　　臥高
古き革籠に反故おし込　　惟然
月影の雪もちかよる雲の色　　支考
しまうて錢を分る鴛かき　　芭蕉
猪を狩場の外へ追にかし　　翠
山から石に名を書て出す　　高
飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌　　然
鳶で工夫をしたる照降　　考
おれが哀歌に讀るゝ橋の番　　蕉
持佛のかほに夕日さし込　　翠
平畦に菜を蒔立したばこ跡　　考
秋風わたる門の居風呂　　然

馬引て賑ひ初る月の影　高
尾張てつきしもとの名になる　蕉
餅好のことしの花にあらはれて　翠

二

正月ものゝ襟もよこさず　高
春風に普請のつもりいたす也　然
藪から村へぬけるうら道　考
喰かねて犂も舅も口きいて　蕉
何ぞの時は山伏になる　翠
笹つとを棒に付たるはさみ箱　高
蕨こはばる卯月野の末　蕉
相宿と跡先にたつ矢木の町　考
際の日和に雪の氣遣　然
呑こゝろ手をせぬ酒の引はなし　翠
着かえの分を舟へあづくる　高
封付し文箱來たる月の暮　蕉
そろ〳〵ありく盆の上藤棚　考

虫籠つる四條の角の河原町　然
高瀬をくる一表固　翠
今の間に鑓を見かくす橋の上　高
大きな鐘のどんに聞ゆる　蕉
盛なる花にも扉おしよせて　然
腰かけつみし藤棚の下　考

續猿蓑集　卷之下

春之部　花櫻

温石のあかるゝ夜半やはつ櫻　露沾

寢時分に又みむ月か初さくら　其角

顏に似ぬほつ句も出よはつ櫻　芭蕉

ちか道や木の股くゞる花の山　洞木

角いれし人をかしらや花の友　丈草

花散て竹見る軒のやすさかな　洒堂

富貴なる酒屋にあそびて、文君か爪音も醉のまぎれに思ひいでらるゝに

酒部屋に琴の音せよ窓の花　惟然

賭にして降出されけりさくら狩　支考

人の氣もかく窺はしはつ櫻　沾德

くもる日や野中の花の北面　猿蓑

七つより花見におくる女中哉　陽和

見る所おもふところやはつ櫻　乙州

咲花をむつかしげなる老木哉　木節

我庭や木ぶり見直すはつ櫻　沾荷

二の膳やさくら吹込む鯛の鼻　子珊

養虫の出方にひらく櫻かな　卓袋

田家

蒟蒻の名物と咲かゝる花や　李里

山門に花ものゝくし木のふとり　桃首

ながれ木の根やあらはるゝ花の瀧　一桐

花笠をきせて似合む人は誰　其角

はれやかに置床なほす花の春　雪

ぬり直す壁のしめりや軒の花　少年　一鷺

一日は花見のあてや且那寺　如角

八重櫻京にも移る奈良茶哉　其角

若菜

濡椽や齊こぼるゝ土ながら　嵐雪
梟の啼やむ岨の若菜かな　曲翠
夕波の船にきこゆるなづな哉　孤屋
一かぶの牡丹は寒き若菜かな　尾頭

梅　附柳

春もやゝ氣色とゝのふ月と梅　芭蕉
きさらぎや大黒棚もむめの花　野水
守梅のあそび業なり野老賣　其角
里坊に碓きくやむめの花　昌房
投入や梅の相手は蕗のたう　良品
病僧の庭はく梅のさかり哉　曾良
あたらしき翠簾まだ寒し梅花　万乎
薄雪や梅の際まで下駄の跡　魚日
しら梅やたしかな家もなきあたり　千川
寢所や梅のにほひをたて籠ん　大丹

身につけと祈るや梅の籬ぎは　遊糸
それ〴〵の籠のなりやむめ柳　千那
時〳〵は水にかちけり川やなぎ　意元
ちか道を教へばぢからや古柳　江東李由
青柳のしだれくぐれや馬の曲　九節
輪をかけて馬乗通る柳かな　巴丈

鳥　附魚

鶯に長刀かゝる　承塵かな　其角
うぐひすや野は塀越の風呂あかり　史邦
鶯に手もと休めむながしもと　智月
鶯や柳のうしろ藪のまへ　去來
瀧壺もひしげと雉のほろゝ哉　芭蕉
春雨や蓑につゝまん雉子の聲　洒堂
駒鳥の目のさやはつす高根哉　傘下
こま鳥の音に似合しき白銀屋　長虹
燕や田をおりかへす馬のあと　野童
巢の中や身を細してをや燕　少年峯嵐

雀子や姉にもらひし雛の禮　槐市
蠅うちになるゝ雀の子飼哉　河瓢
行鴨や東風につれての磯惜み　釣簀

芳野西河の瀧

鮎の子の心すさまじ瀧の音　土芳
かけろふと共にちらつく小鮎哉　圃水
しら魚の一かたまりや汐たるみ　子珊
白魚のしろき噂もつきぬべし　山蜂

深川にあそびて

しら魚をふるひ寄たる四手哉　其角

春草

なぐりても崩たつ世話や春の草　正秀
若草や松につけたき蟻の道　此筋
春の野やいづれの草にかぶれけん　羽紅

尼

川淀や淡をやすむるあしの角　猿雖
宵の雨しるや土筆の長みじか　闇指

味ひや櫻の花によめがはぎ　車來
茨はら咲添ふものも鬼あざみ　荒雀
堤よりころび落れば菫哉　馬菟
蹈またく土堤の切目や蕗の塔　拙候
ふみたふす形に花さく土大根　乃龍
早蕨や笠とり山の柱うり　正秀
みそ部屋のにほひに肥る三葉哉　夕可
日の影に猫の抓出す獨活芽哉　一桐
蒲公英や葉にはそぐはぬ花ざかり　圃蓓

猫戀　附胡蝶

我影や月になを啼猫の戀　探丸
うき戀にたへてや猫の盜喰　支考
おもひかねその里たける野猫哉　巳ノ百

白日しづか也

とまりても翅は動く胡蝶かな　柳梅
衣更着のかさねや寒き蝶の羽　惟然

蝶の舞おつる椿にうたるゝな　闇指
風吹に舞の出來たる小蝶かな　出羽重行
晝ねして花にせはしき胡蝶哉　雪窓

春鹿

振おとし行や廣野の鹿の角　澤雉

春耕

妙福のこゝろあて有さくら麻　木節
苗札や笠縫を(六)きの宵月夜　此筋
千刈の田をかへすなり難波人　一鷺

桃 附椿

白桃やしづくも落す水の色　桃隣
金柑はまだ盛なり桃の花　介我
伏見かと藥種の上の桃の花　雪芝
梅さくら中をたるます桃の花　水鷗
花さそふ桃や歌舞妓の脇躍　其角

江東の李由が祖父の懷舊の法事に、おの〳〵經文題のほつ句に

(六) 標注云、をきハかノ書損ニテ丘カトアル。

彌陀の光明といふ事を

小服綿に光をやどせ玉つばき　角上
穗は枯て臺に花咲椿かな　殘香
取あげて見るや椿のほその穴　洞木
ちり椿あまりもろさに續で見る　野坡

欵冬 附躑躅藤

山吹や垣に干たる蓑一重　闇指

田家の人に對して

山吹も散るか祭の鱘なます　洒堂
掘おこすつゝじの株や蟻のより　雪芝
藪疇や穗麥にとゞく藤の花　荊口

春月

山の端をちから顏なり春の月　長崎魯町

春雨 附春雪蛙

物よわき草の座とりや春の雨　荊口
咄さへ調子合けり春のあめ　乃龍

春雨や唐丸あかる臺どころ　游刀

なにがし主馬か武江の旅店をたづねける時

春雨や枕くづるゝうたひ本　支考

はる雨や光りうつろふ鍛冶か鎚　桃首

淡雪や雨に追るゝはるの笠　風麥

行つくや蛙の居る石の直（ロク）　風睡

汐干

のぼり帆の淡路はなれぬ汐干哉　去來

品川に富士の影なきしほひ哉　闇指

雜春

出がはりやあはれ勸る奉加帳　許六

若草やまたぎ越たる桐の苗　風睡

黒ほこの松のそだちやわか緑　土芳

かげろふや嶺に腰の掛ちから　配力

小米花奈良のはづれや鍛冶が家　万乎

聲毎に獨活や野老や市の中　苔蘇

木の芽たつ雀かくれやぬけ參　ミノ均

春の日や茶の木の中の小室節　水正秀

三尺の鯉はぬる見ゆ春の池　仙化

引鳥の中に交るや田螺とり　支浪

三月盡

朧夜を白酒賣の名殘かな　支考

歲旦

若水や手にうつくしき薄氷　少年武仙

莚道は年のかすみの立所哉　百歲

鶯や雜煮過ての里つゞき　尙白

蓬萊の具につかひたし螺の貝　圃落

母方の紋めづらしやきそ始　山蜂

詩にいへる、衣裳を顚倒すといふ事を、老父の文に書越し侍れば

元日や夜ぶかき衣のうら表　千川

人もみぬ春や鏡のうらの梅　芭蕉

明る夜のほのかに嬉しよめが君　其角

楪の世阿彌まつりや青かつら　嵐雪
萬歳や左右にひらひて松の蔭　去來
鶯に橘見する羽ふきかな　土芳
はつ春やよく仕て過る無調法　風睡

冬年孫を
まうけて

元日やまだ片なりの梅の花　猿雖
子共にはまつ惣領や藏びらき　蔦雫
背たらおふ物を見せばや花の春　野童
齒朶の葉に見よ包尾の鯛の　耕雪

そり

鮭の簀の寒氣をほどく初日哉　左柳
はつ春や年は若狹の白比丘尼　前川
枇杷の葉のなを慥也初霞　斜嶺
世の業や髭はあれとも若夷　山蜂
濡いろや大かはらけの初日影　任行
元日や置ところなき猫の五器　竹戸

我宿はかつらに鏡すえにけり　是樂
搗栗や餅にやはらぐそのしめり　沾圃
虫ぼしのその日に似たり藏びらき　圃角

夏之部

郭公

曉の雹をさそふやほとゝぎす　其角
ほとゝぎす啼や湖水のさゝ濁　丈草
しら濱や何を木陰にほとゝ　曾良

ぎす

蜀魄啼ぬ夜しろし朝熊山　支考
鳴瀧の名にやせりあふほとゝ　如雪

ぎす

燕の居なじむそらやほとゝ　蘆本

ぎす

淀よりも勢田になけかし子規

此句は石山の麓にて
順禮の吟じて

通りけるとや

郭公かさいの森や中やどり　沾圃

木附草花

橙や日にこがれたる夏木立　闇指

里〳〵の姿かはりぬなつ木だち　野荻

園中　二句

此中の古木はいづれ柿の花　此筋

年功の老木も柿の若葉哉　千川

姫百合や上よりさがる蛛の糸　素龍

題山家之百合

しら雲やかきねを渡る百合花　支考

山もえにのかれて咲やかきつばた　尾頭

冷汁はひえすましたり杜若　沾圃

手のとゞく水際うれし杜若　イガ宇多都

夏菊や茄子の花は先へさく　拙候

はせを庵の卽興

晝がほや日はくもれども花盛　沾圃

夕顔や醉てかほ出す窓の穴　芭蕉

夕かほや裸でおきて夜半過　亡人

藻の花をちぐみ寄たる入江哉　嵐蘭

蘭の花にひた〳〵水の濁り哉　殘香

蓮の葉や心もとなき水離れ　此筋

客あるじ共に蓮の蠅おはん　白雪

瓜　良品

朝露によごれて涼し瓜の土　芭蕉

姫ふりや袖に入ても重からず　至曉

ぼたん

麁相なる膳は出されぬ牡丹哉　風弦

早苗

京入や鳥羽の田植の歸る中　長崎卯七

早乙女に結んでやらん笠の紐　闇指

ふとる身の植おくれたる早苗哉　魚日
田植歌までなるの顔に諷ひ出し　重行
一田づゝ行めぐりてや水の音　北技
里の子が燕握る早苗かな　支考

螢

蚊遣火の烟そるゝほたるかな　許六
三日月に草の螢は明にけり　野荻

納涼

涼しさや竹握り行藪つたひ　半残
無菓花や廣葉にむかふ夕涼　惟然

深川の庵に宿して

ばせを葉や風なきうちの朝涼　史邦
涼しさや鴛籠を出ての繩手みち　重翠
石ぶしや裏門明て夕涼み　長崎牡年
涼しさよ牛の尾振て川の中　万乎

漫興　三句

腰かけて中に涼しき階子哉　洒堂
涼しさや椽より足をぶらさげる　支考
生醉をねぢすくめたる涼かな　雪芝

はせを翁を

茅屋にまねきて

涼風も出來した壁のこはれ哉　游刀
いそがしき中をぬけたる涼かな　仝
立ありく人にまぎれてすゞみかな　去來
默禮にこまる涼みや石の上　正秀
職人の帷子きたる夕すゞみ　土芳
涼しさや一重羽織の風たまり　我眉
夜涼やむかひの見世は月がさす　里圃

盛夏

かたばみや照りかたまりし庭の隅　野荻
李盛る見世のほこりの暑哉　万乎

藪醫者のいさめ申されし

に答へ侍る

實にもとは請て寢冷の暑かな　正秀

取菁の内のあつさや棒つかひ　乙州

煤さがる日盛あつし臺所　怒風

茨ゆふ垣もしまらぬ暑かな　尾張 素覽

草の戸や暑を月に取かへす　我峯

あつき日や扇をかざす手のほそり　印苔

積あげて暑さいやます疊かな　卓袋

粘になる蚫も夜のあつさかな　里東

立寄ればむつとかぢやの暑かな　沾圃

竹の子

荀にぬはるゝ岸の崩かな　可誠

若竹や烟のいづる庫裏の窓　曲翠

五月雨（七）附夕立

しら鷺や青くもならす黴（ツユ）の中　出羽 不玉

さみだれや蠶煩ふ桑の畑　芭蕉

（七）○原板雨ノ字脱ス。今補之トアル。

五月雨や踵よごれぬ礒づたひ　沾圃

夕立にさし合けり日傘　拙候

白雨や蓮の葉たゝく池の蘆　苔蘇

夕だちやちらしかけたる竹の皮　曉烏

ゆふ立に傘かる家やま一町　圃水

蟬

白雨や中戻りして蟬の聲　正秀

きつと來て啼て去りけり蟬のこゑ　胡故

森の蟬涼しき聲やあつき聲　乙州

蟬啼やぬの織る窓の暮時分　曉烏

かつを

籠の目や潮こぼるゝはつ鰹　葉拾

雜夏

晝寐して手の動やむ團扇かな　杉風

虫の喰ふ夏菜とぼしや寺の畑　荊口

夏瘦もねがひの中のひとつなり　如（イセ）眞

川狩にいでゝ

じか燒や麥からくべて柳鯰（ハヘ）　文烏

異草（コトグサ）に我がちがほや園の紫蘇　蔦雫（八）

夕闇はほたるもしるや酒はやし　水鷗

せばきところに老母をやしなひて

魚あぶる幸もあれ澁うちは　馬莧

梅むきや笊（イガキ）かたぶく日の面（オモテ）　重翠

澤潟や道付かゆる雨のあと　野童

蝸牛つの引藤のそよぎかな　水鷗

晋の淵明をうらやむ

窓形に晝寐の臺や簟（タカムシロ）　芭蕉

糊（九）ごはな帷子かぶるひるねかな　惟然

貧僧のくろしみ、冬の寒さはふせぐよすがなきに、夏日の納涼は扇一本にして世上に交る。

（八）原本、蔦雫トアル。

（九）原本粘トアル。

帷子のねがひはやすし錢五百　支考

龝の部

名月

名月に麓の霧や田のくもり　ばせを

名月の花かと見えて棉畠

ことしは伊賀の山中にして、名月の夜この二句をなし出して、いづれか是、いづれか非ならんと侍しに、此間わかつべからず。月をまつ高根の雲ははれにけりこゝろあるべき初時雨かなと、圓位ほうしのたどり申されし麓は、霧横り、水ながれて、平田渺〳〵と曇りたるは、老杜が唯雲水のみなりといへるにもかなへるなるべし。その次の棉ばたけは、言葉麗にして、心はなやかなり。いはゞ今のこのむ所の一筋に便あらん。月のかつらのみやはなる。ひかりを花とちらす斗にとおもひやりたれば、花に清香あり、月に陰ありて、是も詩哥の間をもれず。しか

らば前は寂寞をむねとし、後は風興をもつぱらにす。吾こゝろ何ぞ是非をはかる事をなさむ。たゞ後の人なほあるべし。

名月の海より冷る田養かな　洒堂
明月や西にかゝれば蚊屋のつき　如行
もの〳〵の心根とはん月見哉　露沾
ふたつあらばいさかひやせむけふの月　智月
名月や長屋の陰を人の行　閻指
明月や更科よりのとまり客　涼葉
中切の梨に氣のつく陰もなし　不玉
名月や草のくらみに白き花　配力
明月や遠見の松に人もなし　左柳
をがむ氣もなくてたゝふと　圃水
やけふの月　山蜂

支考評

明月や寢ぬ處には門しめず　風國
名月や四五人乘し艫（ヒラク）ぶね　需笑
老の身は今宵の月も內でみむ　重友
明月にかくれし星の哀なり　泥芹

いせの山田にありて、かりの庵をおもひ立けるに

二見まで庵地たづぬる月見哉　支考
芥子蒔と畑まで行む月見哉　空牙
柿の名の五助と共に月みかな　如眞
山鳥のちつとも寢ぬや峯の月　宗比
名月や里のにほひの青手柴　木枝
場に居て月見ながらや莚機　利合
明月や聲かしまし女中方　丹楓
明月や何もひろはず夜の道　野荻
飛入の客に手をうつ月見哉　正秀

淀川のほとりに日をくらして

舟引の道かたよけて月見哉　丈草
待宵の月に床しや定飛脚　景桃

家に三老女といふ叓あり。亡父將監が秘してつたへ侍しをおもひ出て

姨捨を

闇にのぼるやけふの月　沾圃
露おきて月入あとや塀のやね　馬莧
蔦かつら月まだたらぬ梢哉　里東
月影や海の音聞長廊下　牧童

深川の末五本松といふ所に船をさして

川上とこの川しもや月の友　芭蕉
十六夜はわづかに闇の初哉　仝
いざよひは闇の間もなし　猿雖

七夕

そばの花

更行や水田の上のあまの河　惟然
星合を見置て語れ朝がらす　涼葉
船形の雲しばらくやほしの影　東潮
たなばたをいかなる神にいはふべき　沾圃
朝風や薫姫の團扇もち　乙州

立秋

粟ぬかや庭に片よる今朝の秋　露川
秋たつや中に吹るゝ雲の峯　左次

穐草

朝露の花透通す桔梗かな　柳梅
細工にもならぬ桔梗のつぼみ哉　隨友
女郎花ねびぬ馬骨の姿哉　濁子
をみなへし鵜坂の杖にたゝかれな　馬莧

一筋は花野にちかし畑道　烏栗
弓固とる比なれや藤ばかま　支浪

贈芭蕉庵

(十)「木万乎」ノ乎スリツブレテ不明。

百合は過芙蓉を語る命かな　風麥

さよ姫のなまりも床しつまね花　史邦

枯のぼる葉は物うしや鷄頭花　(十)万乎

鷄頭や鴈の來る時なほあかし　芭蕉

鷄頭の散る哀しらぬ日數哉　至曉

折〳〵や雨戸にさはる荻のこゑ　雪芝

蔦の葉や殘らず動く秋の風　荷兮

山人の晝寐をしばれ蔦かつら　加賀山中 桃妖

風毎に長くらべけり蔦かつら　杉下

朝がほ

朝顔の莟かぞへむ薄月夜　田上尼

あさがほの這うてしだるゝ柳かな　闇指

水も有あさがほたもて錫の舟　風麥

朝貌にしほれし人や鬘帽子　其角

虫 附鳥

(十一)原本、火の消てノ句ハ、前後ノ句ノ間ニ、割込ンデスラレテアル。

(十二)原本、蟷螂やトアリテ、やノ傍ニのト加筆ガアル。

ぎぼうしの傍に經よむいとゞかな　女 可南

竈馬(コホロギ)や顔に飛つくふくろ棚　北枝

(十一)火の消て胴にまよふか虫の聲　正秀

秋の夜や夢と鼾ときり〴〵す　水鷗

みの虫や形に似合し月の影　杜若

蜻蛉や何の味ある竿の先　探丸

(十二)蟷螂や腹をひやすか石の上　蔦雫

蓮の實に輕さくらべん蟬の空(カラ)　示峯

ぬけがらにならびて死る秋のせみ　丈草

鴈がねにゆらつく浦の笘屋哉　馬莧

鵁鶄や走り失たる白川原　氷固

粟の穗を見あぐる時や啼鶉　支考

老の名の有ともしらで四十雀　芭蕉

穐風

秋かぜや二番たばこのねさせ時　游刀

雀子の髭も黒むや秋の風　式之
何なりとからめかし行秋の風　支考
松の葉や細きにも似ず秋の聲　風國
おのづから草のしなへを野分哉　圃燕
ふんばるや野分にむかふはしら賣　九節
あれ〳〵て末は海行野分かな　猿雖

稲妻

獨ゐて留守ものすごし稲の殿　少年一東
稲妻や雲にへりとる海の上　宗比
明ぼのや稲づま戻る雲の端（ハシ）　土芳
いなづまや闇の方行五位の聲　芭蕉

木實 附菌

團栗の落て飛けり石ぼとけ　爲有
炭燒に澁柿たのむ便かな　玄虎
秋空や日和くるはす柿のいろ　洒堂
つぶ〳〵と箒をもるゝ榎み哉　重翠
はつ茸や鹽にも漬ず一盛　沾圃

伊賀の山中に阿叟の閑居を訪らひて

松茸や都にちかき山の形　惟然
（十三）まつ茸やしらぬ木の葉のへばり　芭蕉

つく

楓

後屋の塀にあれたり村紅葉　北鯤

鹿

尻すほに夜明の鹿や風の音　風睡
寐がへりに鹿おどろかす鳴子哉　一酌

農業

起しせし人は迯けり蕎麥の花　車庸
木の下に狸出むかふ穗懸かな　買山
さまたげる道もにくまじ疇（アゼ）の稲　如雪

（十四）いせの斗從に山家をとはれて

蕎麥はまだ花でもてなす山路かな　芭蕉

（十三）原本、まつ茸やしらぬ木の葉ノ句ニ、いせの斗從に山家をとはれてト前書シテ、ソレヲ消シテアル。

（十四）原本、此ノ前書前後ノ句ノ間ニ割込マセル。蕎麥はノ句モ、從ツラ行間ニ割込ムコト、ナル。

早稲刈て落つきがほや小百姓　乃龍
山雀のどこやらに啼霜の稲　斗從
居りよさに河原鶸(ヒハ)來る小菜畠　支考
一霜の寒や芋のずんと刈　同
肌寒き始にあかし蕎麥の　惟然
百なりていくらが物ぞ唐がらし　木節

大師河原にあそびて、樽次といふものゝ孫に逢ひて

そのつるや西瓜上戸の花の種　沾圃

菊

翁草二百十日も恙なし　蔦(十五)雫
ゑぼし子やなど白菊の玉牡丹　濁子
煮木綿の雫に寒し菊の花　支考

題畫屏

むかばきやかゝる山路の菊の露　兀峯
借りかけし庵の噂やけふの菊　丈草

(十五)原本雫ノ字缺ケル。

暮秋

廣澤や背負うて歸る秋の暮　野水
行秋を皷弓の糸の恨かな　乙州
行あきや手をひろげたる栗のいが　芭蕉

雜穐

五六十海老つひやしてはぜ(十六)一ッ　之道
栗がら(十七)の小家作らむ松の中　團友
あら鷹の壁にちかづく夜寒かな　珪止
殘る蚊や忘れ時出る秋の雨　口友
身ぶるひに露のこぼるゝ靱哉　荻子
更る夜や稲こく家の笑聲　万乎
柿の葉に燒みそ盛らん薄箸　乗門宗波

本間主馬が宅に、骸骨どもの笛皷をかまへて、能する處を畫て、舞臺の壁にかけたり。まことに生前のたはふれなどは、このあそびにことならんや。かの髑(十八)

(十六)原本鰕トアル。

(十七)原本、あら鷹ノ句ヲ前後ノ句ノ間ニ割込マセル。

(十八)原本、殊ならんやトアル。

髏を枕として、終に夢うつゝを
わかたざるも、只この生前をし
めさるゝものなり。

稲づまやかほのところが　ばせを

薄の穂

冬之部

雨時 附霜

この比の垣の結目やはつ時雨
しぐれねば又松風の只おかず
けふばかり人も年よれ初時雨
一時雨またくづをるゝ日影哉
初しぐれ小鍋の芋の煮加減
平押に五反田くもる時雨かな
柴賣やいでゝしぐれの幾廻り

野坡　北枝　芭蕉　露沾　馬莧（千）　野明　閻指

（十九）原本、馬莧ノ莧ノ字缺ケル。

椀賣も出よ芳野の初時雨　空牙
穴熊の出ては引込時雨かな　爲有
更る夜や鏡にうつる一しぐれ　鶏口
石に置て香爐をぬらす時雨哉　野狄
柿包む日和もなしやむら時雨　露川
高みよりしぐれて里は寐時分　里圃

浮雲をそなたの空におきにしの
日影よりこそあめになりけれ

沖西の朝日くり出す時雨かな　沾圃
はつ霜や犬の土かく爪の跡　北鯤
ひとつばや一葉〳〵の今朝の霜　支考

元祿辛酉之初冬
九日素堂菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふにまうけ
侍る哀は、その比は花いまだめぐ
みもやらず。菊花ひらく時則重陽
といへるこゝろにより、かつは展

重陽のためしなきにしもあらねば、
なほ秋菊を詠じて、人〳〵をすゝ
められける哀になりぬ。

菊の香や庭に切たる履の底　芭蕉
柚の色や起あがりたる菊の露　其角
菊の氣味ふかき境や藪の中　桃隣
八專の雨やあつまる菊の露　沾圃
何魚のかざしに置ん菊の枝　曾良
菊畠客も圓座をにじりけり　馬莧

柴葉の隱士無絃の琴を翫しをお
もふに、菊も輪の大ならん哀を
むさぼり、造化もうばふに及ば
じ。今その菊をまなびて、おの
づからなるを愛すといへ共、家
に菊ありて琴なし。かけたるに
あらずやとて、人見竹洞老人素

琴を送られしより、是を夕にし、
是を朝にして、あるは聲なきに
聽き、あるは風にしらべあはせ
て、自ほこりぬ。

草木

水仙や練塀われし日の透間　素堂
なほ淸く咲や葉がちの水仙花　曲翠
水仙の花のみだれや藪やしき　氷固
范蠡が長男のこゝろをいへる　惟然

山家集の題に習ふ

一露もこぼさぬ菊の氷かな　芭蕉
山茶花は元より開く歸り花　車庸
多梅のひとつふたつや鳥の聲　土芳
山茶花も落てや雪の散椿　露笠

木葉　附多枯風

おもひなし木の葉ちる夜や星の數　沾德

（二十）標注ニ、長男ニテ（チヤウナン）超南ハ書損ナリトアル。

星さえて江の鮒ひらむ葉落哉
多川や木の葉は黒き岩の間
麓より足ざはりよき木の葉哉

本柳坊宗比の
庵をたづねて

はいるより先取てみる落葉哉
枯はてゝ霜にはぢずやをみなへし
牛の行道は枯野のはじめかな
多枯に去年きて見たる友もなし
草枯に手うつてたゝぬ鳴もあり

野は枯てのばす物なし鶴の首
木がらしや色にも見えず散もせず
凩や背中吹るゝ牛の聲
木枯や刈田の畔の鐵氣水

こがらしや藁まきちらす牛の角

夷講

露沾　一道
惟然　杉風
枳風　桃酔
　　乃龍
　　利牛

支考
智月
風竹
惟然
塵生

えびす講酢賣に袴着せにけり
惠比須講鯊も鴨に成にけり

芭蕉　利合

鳥附いをのとの海をみて

塵濱にたゝぬ日もなし浦廻
追かけて雹にころぶ千鳥かな
小夜ちどり庚申まちの舟屋形
入海や碇の筌に啼千鳥

雹につゝみてぬくし鴨の足
たつ鴨を犬追かくるつゝみかな
杓汐にころび入べき生海鼠かな

うかゝと海月に交るなまこ哉
見え透や子持ひらめのうす氷
一鹽にはつ白魚や雪の前
かくふつや腹をならべて降霰

句空
蔦雫
丈草
闇指
芭蕉
乍木
利雪
車庸
岱水
杉風
拙候

杜夫魚（カクフツ）は河豚の大さにて水上に浮ぶ。
越の川にのみあるうをなり。

多月 附会

喰ものや門賣ありく多の月　里圃
あら猫のかけ出す軒や多の月　丈草
何哀も寐入るまでなり紙ぶすま　小春
水仙や門を出れば江の月夜　支考

埋火

埋火や壁には客の影ぼうし　芭蕉
佗しさは夜着を縣たる火燵かな　少年桃先

雪

自由さや月を追行置火燵　洞木
初雪や門に橋あり夕間暮　其角
朝こみや月雪うすき酒の味　仝
雪あられ心のかはる寒さ哉　夕菊

鷦鷯家はとぎるゝはだれ雪　祐甫
雪垣やしらぬ人には霜のたて　蔦雫

ふたつ子も草鞋を出すやけふの雪　支考
片壁や雪降かゝるすさ俵　圃吟
思はずの雪見や日枝の前後　丈草
髪剃ば降來る雪か比良の峯　陽和

伊賀大和かさなる山や雪の花　配力

神樂

夜神樂に齒も喰しめぬ寒哉　史邦

鉢たゝき

食時やかならず下手の鉢扣　路草
鉢たゝき千鮭賣をすゝめけり　馬莧
嫁入の門も過けり鉢たゝき　許六
狼を送りかへすか鉢たゝき　沾圃

煤掃 附餅つき

（二十二）原本米鶩トアツテ傍ニ黄逸トアル。

煤はきや鼠追込黄楊の中　殘香
煤掃やあたまにかぶるみなと紙　米鶩（黄逸）
才覺な隣のかゝや煤見舞　馬莧
煤はきやわすれて出る鉢ひらき　闇如（ミノ）
煤拂や折敷一枚蹈くだく　惟然
餅つきや火をかいて行男部屋　岱水
餅つきやあがりかねたる鷄のとや　嵐蘭
もち搗の手傳ひするや小山伏　馬佛

歳暮　附節季候　衣配

こねかへす道も師走の市のさま　曾良
門砂やまきてしはすの洗ひ髪　里東
賣石やとつてもいなず年の暮　草士
猿も木にのぼりすますやとしの暮　車來
大年や親子たはらのさし荷ひ　万乎
袴きぬ聟入もありとしの昏　李由
年の市誰を呼らん羽織との　其角
打こぼす小豆も市の師走哉　正秀

引結ぶ一つぶ銀やとしの暮　荻子
桶の輪のひとつあたらし年の　猿雖
天鵝毛（ビロウド）のさいふさがして年の暮　惟然
濱荻に筆を結せてとしの暮

此句は圖司呂丸が羽ぐろより京にのぼるとて、伊勢にもまうで侍りければ、そのとしの暮かゝる夏もいひ殘して今はなき人とはなりし。

盗人にあうた夜もあり年の暮　芭蕉
余所に寐てどんすの夜着のとし忘　支考
漸に寐所出來ぬ年の中　土芳
節季候や弱りて歸る藪の中　尚白
節季候の拍子をぬかす明屋哉　桃後（少年）

裁屑は末の子がもつきぬ配　山蜂
一しきり啼て靜けし除夜の鷄　利合

雜冬

小屏風に茶を挽かゝる寒さ哉　斜嶺
植竹に河風さむし道の端　土芳
井の水のあたゝかになる寒哉　李下
寒聲や山伏村の長つゝみ　仙杖
霜ばしらおのがあげしや土龍（ウコロモチ）　圃仙
火燵より寢に行時は夜半哉　雪芝
山陰や猿が尻抓く冬日向　コ谷
俎板に人參の根の寒さ哉　沾圃
菊刈や冬たく薪の置所　杉風

釋教之部 附追善哀傷

涅槃

涅槃像あかき表具も目に　沾圃
たゝず

ねはん會や皺手合る珠數の音　芭蕉
山寺や猫守り居るねはむ像　不撤
貧福のまことをしるや涅槃像　山蜂

灌佛

灌佛やつゝじならぶる井戸の　曲翠
やね
散花や佛うまれて二三日　不玉
灌佛や釋迦と提婆は從弟どし　之道

魂祭

喰物もみな水くさし魂まつり　嵐雪
寐道具のかた〳〵やうき魂祭　去來
やま伏や坊主をやとふ魂祭　沾圃

甲戌の夏大津に侍しを、このかみのもとより消息せられければ、舊里に歸りて盆會をいとなむとて

家はみな杖にしら髮の墓參　芭蕉

悼少年　二句

かなしさや麻木の箸もおとなしみ　惟然

その親をしりぬその子は秋の風　支考

かまくらの

龍口寺に詣て

首の座は稲妻のするその時か　木節

はか原や稲妻やどる桶の水　支梁

御影講

柚も柿もおがまれにけり御影講　沾圃

臙八

腸をさぐりて見れば納豆汁　許六

何のあれかのあれけふは大師講　如行

雜題

洛東の眞如堂にして、

善光寺如來開帳の時

涼しくも野山にみつる念佛哉　去來

有ると無きと二本さしけり　智月

けし畑や散しづまりて佛在世　乙州

ものゝふに川越問ふや富士まうで　重翠

手まはしに朝の間涼し夏念佛　野坡

食堂に雀啼なり夕時雨　支考

旅之部

送別

元祿七年の夏ばせを翁

の別を見送りて

麥ぬかに餅屋の見世の別かな　荷兮

別るゝや柿喰ひながら坂の上　惟然

許六が

木曾路におもむく時

旅人のこゝろにも似よ椎の花　芭蕉

留別

洛の惟然が宅より

古郷に歸る時

鼠ども出立の芋をこがしけり　丈草

鮎の子のしら魚送る別哉　芭蕉

甲斐のみのぶに詣ける時、

宇都の山邊にかゝりて

年よりて牛に乘りけり蔦の路　木節

稻づまや浮世をめぐる鈴鹿山　越人

にべもなくついたつ蟬や旅の宿　野徑

出羽の國におもむく時、

みちのくのさかひを過て

そのかみは谷地なりけらし小夜碪　公羽

十團子も小つぶになりぬ秋の風　許六

大名の寐間にもねたる夜寒哉　仝

くま野路

くるしさも茶にはかつへぬ盆の旅　曾良

つばくらは土で家する木曾路哉　猿雖

明ぼのはたちばなくらし旅姿　我峯

煎りつけて砂路あつし　史邦

原の馬

回國の心ざしも漸く伊勢のくにゝいたりて

文臺の扇ひらけば秋涼し　亡人呂丸

我蒲團いたゞく旅の寒かな　沾圃

常陸の國あしあらひといふ所に行暮て、やどり求んとせしに、その夜はさる夏ありとて、宿をかさゞりければ、一夜別時の軒の下にかゝまりふして

椽に寐る情や梅に小豆粥　支考

はつ瓜や道にわづらふ枕もと　仝

元祿三年(二十三)の冬、粟津の草庵より武江におもむくとて、嶋田の驛

(二十三)標注ニ、元祿三年ハ四年ノ書損ナルベシトアル。

塚本が家にいたりて

宿かりて名をなのらする　ばせを

しぐれかな

續猿蓑は芭蕉翁の一派の書也。何人の撰といふ事をしらず。翁迂化の後、伊賀上野翁の兄松尾なにがしの許にあり。某懇望年を經て、漸今歳の春本書をあたへ、世に廣むる事をゆるし給へり。書中或は墨けし、あるひは書入等のおほく侍るは、草稿の書なればなり。一字をかへず、一行をあらため ず、その書其手跡を以て直に板行をなす物也。

元祿十一寅
五月吉日

ゐつゝ屋
庄兵衛書圃

—完—

昭和四年二月一日印刷
昭和四年二月十五日發行

改造文庫　第二部第十三篇
俳諧七部集　定價三十錢

校訂者　萩原藤月
發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四ノ六
印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)二一一一番
二一一四番

株式會社秀英舍印刷

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。
我社が大正十五年十一月多大の犧牲を豫期して廉價全集を發行するや、
感激の聲國內を震憾し、日日數千通の感謝狀が舞ね込んだ。今迄特權階
級のみの藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無
產階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍
となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史
上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して茲に「改造文庫」を發
刊せんとす。尙その內容は別記の如くであるが、我社は數十年を期して
あらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆的一大文庫を建設せんと欲
す。諸君の期待と支持を俟つ。

□此の文庫は、內容の嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、專ら大衆普及を目的として刊行す。

□此文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亙り、校訂、註釋、飜譯、總て典據たるべきを期す。

□此文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歷史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。

□表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜をも考慮に容れて之を示す。

□一冊の分量は約百頁以上五百頁とし定價は約百頁を單位として拾錢としその冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす、但、地圖附錄等挿入の場合は、必らずしもこの例に依らず。

□表紙意匠中、1.は十錢、2.は二十錢を、3.は三十錢を示す。以下之に倣ふ。

□定價及び送料左表の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇	八〇
送料(錢)	二	四	六	八	一〇	一二	一四	一六

改造文庫第一部目錄

第一篇 富國論（上卷） アダム・スミス著（刊近）
第二篇 富國論 中卷） アダム・スミス著（刊近）
第三篇 富國論（下卷） アダム・スミス著（刊近）
第四篇 人口論 ロバート・マルサス著（刊近）
第五篇 經濟學原理 デボト・リカアド著（刊近）
第六篇 經濟學原理（上卷） スチュアド・ミル著（刊近）
第七篇 經濟學原理（下卷） スチュアド・ミル著（刊近）
第八篇 經濟學方法論 カール・メンガー著（刊近）
第九篇 經濟學原理 チェボンス著（刊近）
第一〇篇 社會主義の發展 エンゲルス著 堺利彥譯 1
第一一篇 マルキシズム認識論 デイツゲン著 石川準十郎譯 1
第一二篇 辯證法的唯物觀 デイツゲン著 山川均譯 2
第一三篇 哲學の實果 デイツゲン著 山川均譯 1
第一四篇 神と國家 バクーニン著 本莊可宗譯 1
第一五篇 婦人論 ベーベル著 山川菊榮譯 6
第一六篇 古代社會（上卷） モルガン著（刊近）
第一七篇 古代社會 下卷） モルガン著（刊近）
第一八篇 エミール（上卷） ルーソウ著 内山賢次譯 4

第一九篇 エミール（下卷） ルーソウ著 内山賢次譯 4
第二〇篇 國家論 オツペンハイマー著 廣島定吉譯 2
第二一篇 金融資本論 猪俣津南雄著（刊近）
第二二篇 日本開化小史 田口卯吉著 2
第二三篇 日本經濟論 田口卯吉著 1
第二四篇 日本經濟學說要領 經濟的帝國論 龜本誠一著（刊近）
第二五篇 日本商業史 横井時冬著（刊近）
第二六篇 日本工業史 横井時冬著 4
第二七篇 經濟學の實際知識 高橋龜吉著 2
第二八篇 リッケルト論文集 リッケルト著 2
第二九篇 フッサール論文集 フッサール著（刊近）
第三〇篇 女工哀史 細井和喜藏著 4
第三一篇 婦人解放論 スチュアド・ミル著（刊近）
第三二篇 社會進化と婦人の地位 ラッパポート著 山川菊榮譯 2
第三三篇 共產主義小兒病 レーニン著（刊近）
第三四篇 二十世紀初頭の農村問題 レーニン著（刊近）
第三五篇 文學と革命 トロツキイ著（刊近）
第三六篇 幸德秋水集 幸德秋水著（刊近）
第三七篇 中江兆民集 中江兆民著（刊近）
第三八篇 財產起源論 レヴインスキー著 貴島克己譯 1

改造文庫第二部目錄

第一篇 古事記 澤瀉久孝校訂（近刊）
第二篇 萬葉集（上卷） 折口信夫校訂（近刊）
第三篇 萬葉集（下卷） 折口信夫校訂（近刊）
第四篇 古今集 吉澤義則校註（近刊）
第五篇 新古今集 吉澤義則校註（近刊）
第六篇 新編源氏物語（上卷） 折口信夫校註（近刊）
第七篇 新編源氏物語（下卷） 折口信夫校註（近刊）
第八篇 枕草紙 山岸德平校訂（近刊）
第九篇 金槐集 幸田露伴校註（近刊）
第一〇篇 平家物語 （近刊）
第一一篇 雨月物語 山口剛校訂（近刊）
第一二篇 山家集 齋藤茂吉校註（近刊）
第一三篇 俳諧七部集 萩原蘿月校訂 3
第一四篇 蕪村七部集 萩原蘿月校訂（近刊）
第一五篇 伊勢物語 久松潜一校訂（近刊）
第一六篇 神皇正統記 宮地直一校訂（近刊）
第一七篇 奥の細道 芭蕉翁文集 萩原蘿月校訂 3
第一八篇 曾根崎心中 女殺油地獄 黒木勘藏校註（近刊）
第一九篇 心中天島宴 冥途飛脚 黒木勘藏校註（近刊）
第二〇篇 國姓爺合戰 黒木勘藏校註（近刊）
第二一篇 槍權三重帷子 夕霧阿波鳴渡 黒木勘藏校註（近刊）
第二二篇 心中重井筒 丹波與作 黒木勘藏校註（近刊）
第二三篇 山崎與次兵衞壽門松、心中宵庚申 黒木勘藏校註（近刊）
第二四篇 傾城反魂香 黒木勘藏校註（近刊）
第二五篇 淀鯉出世瀧徳 長町女腹切 黒木勘藏校註（近刊）
第二六篇 堀川波鼓 博多小女郎波枕 黒木勘藏校註（近刊）
第二七篇 五十年忌歌念佛 大經師昔曆 黒木勘藏校註（近刊）
第二八篇 菅原傳授手習鑑 假名手本忠臣藏 黒木勘藏校註（近刊）
第二九篇 八百屋お七歌祭文 お染久松袂の白絞り 黒木勘藏校註（近刊）
第三〇篇 伊賀越道中双六 一谷嫩軍記 黒木勘藏校註（近刊）
第三一篇 大鏡 吉澤義則校註（近刊）
第三二篇 徒然草 吉澤義則校註（近刊）
第三三篇 日蓮上人集 （近刊）
第三四篇 親鸞上人集 （近刊）
第三五篇 北村透谷選集 島崎藤村編 1
第三六篇 樋口一葉選集 樋口一葉著 1
第三七篇 平 凡二葉亭主人著 1

第三八篇 子規俳話 正岡子規著（近刊）
第三九篇 子規歌話 正岡子規著（近刊）
第四〇篇 坊つちやん 夏目漱石著 2
第四一篇 草枕 夏目漱石著 2
第四二篇 それから 夏目漱石著 3
第四三篇 一握の砂 悲しき玩具 石川啄木著 2
第四四篇 我等の一團と彼 雲は天才である 石川啄木著 1
第四五篇 山陰土産その他 島崎藤村著 2
第四六篇 作曲白秋民謡集 北原白秋著 2
第四七篇 獄中記 オスカア・ワイルド著（近刊）
第四八篇 厭世家の誕生日 佐藤春夫著 1
第四九篇 日輪 横光利一著 1
第五〇篇 労働者の居ない船 葉山嘉樹著 1
第五一篇 海に生くる人々 葉山嘉樹著 2
第五二篇 小公子 バアネット著 若松賤子譯 2
第五三篇 ホワイト・ファング 堺利彦譯 3
第五四篇 はやり唄 小杉天外著（近刊）

（以下續刊）

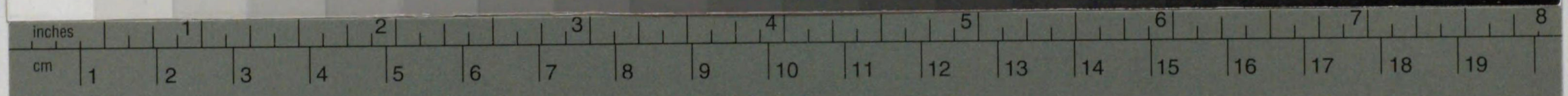
569
142

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black